

ガールズ&パンツァー ～白い死神～

Ayuru

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は、戦車が大好き（特にソ連戦車）な主人公二人が、ガルパンの世界にTS転生して色々やっていく物語です。

※この作品は中華総理大臣様との合作作品です。

目次

原作開始前

1 『転生』 | 1

2 『西住』 | 6

3 『決意』 | 19

4 『入学』 | 44

5 『夏休み』 | 59

6 『決勝戦』 | 112

設定

設定 | 125

本編開始 (TV編)

1 『戦车道』 | 132

2 『再会』 | 145

3 『搜索』 | 163

4 『初戦闘 (1)』 | 193

5 『初戦闘 (2)』 | 205

6 『休息』 | 222

7 『練習試合』 | 231

231 222 205 193 163

原作開始前

1 『転生』

そこは、真つ白な空間だった。その空間には、俺（?1）と俺の友人（?2）がいた。

?2 「お?起きたか」

どうやら友人は俺よりも先に目覚めていたらしい。

?1 「ああ。それより、ここはどこだ？」

?2 「さあ?俺も目を覚ましたらここにいたからな」

??? 「あ、二人とも目覚めましたか」

不意に後ろから男性の声が聞こえた。俺達はその声の主の方を向く。するとそこに

は、渋い感じのダンディーな男の人が立っていた。

??? 「はじめまして」

? 2 「あ、どうも」

? 1 「はじめまして。あの、ここはどこなんですか？それにあなたは…」

??? 「わたしはあなた達の言うところの……いわば『神』という存在です。まあ、そんなに偉いわけではないのですが。そしてここはわたしが管理している『転生の間』と呼ばれる、『死んだ人を別の世界へと転生させる場所』です」

? 1 & ? 2 「……………へ？」

男の人（以降神様）からとんでもない言葉が飛び出した。神？転生？どういう事だ？と言うか、ここが『死んだ人を別の世界へと転生させる場所』だっていうなら……え?!

? 1 & ? 2 「俺らって死んだの!?!」

?!?!?!?!

「どうやら友人も同じ事を考えていたらしい。まあ普通そうだろう。今の言葉が、『俺達は死んだ』と言われたのと同じなのだから。」

神様「ええ。理由はわたしよりも上の神が面白半分であなただを死なせたのです」

? 1 & ? 2 「は? (威圧)」

神様「ま、まあまあ落ち着いて。その神は重罪を犯した罪で神の座から失脚されて地獄に落ちましたから。そこで、あなた達にはお詫びとしてあなた達の好きな世界へ転生して下さい」

? 2 「なら、転生先は『ガールズ&パンツァー』の世界にして下さい。お前もそれで良いべ?」

? 1 「もちろん」

神様「分かりました。転生先は『ガールズ&パンツァー』の世界ですね。容姿はどう

しますか？」

? 1 「じゃあ俺は艦これの『涼月』をお願いします」

? 2 「なら俺は艦これの『響』で」

神様「分かりました。では最後に『特典』を決めます。よくあるのは『運動能力の強化』等ですかね」

? 2 「俺は弱点完全把握と各車両特性の完全把握。あとは集中力を普通の人よりも長く続けられるようにして下さい」

? 1 「なら俺は情報分析能力強化、聴力強化、視力強化の3つをお願いします」

神様「分かりました。これで転生の準備は完了です。第二の人生を思う存分楽しんで下さい」

神様がそこまで言うと、だんだんと意識が薄れていく。
薄れていく意識の中で、俺達はこれから始まる第二の人生に心を踊らせていた。

2 『西住』

転生してから10年が経った。え？その間に何があつたのか詳しく？説明面倒だから箇条書きで説明するね。

1：ガルパンの世界に（赤ん坊の状態で）転生する

2：偶然にも転生先が島田家の前だった為、そのまま島田家の養子になり、その際千歳（？1）と優音（？2）の名をもらう

3：俺達が3歳になった年に妹の愛里寿が産まれる

4：愛里寿が産まれてからずっと二人で愛里寿と遊んでたら愛里寿が早くもお姉ちゃんなつ子になった（大歓喜）。あとボコられぐまのボコにはまつた

こんな感じの10年間だったよ。中々に充実した10年間だったね。え？お前誰だよって？転生した一人目の方だよ。千歳（ちとせ）って名前の方ね。因みに俺と優音は小5、愛里寿は小2になった。

で。今日は俺、優音、愛里寿、母さんの4人で西住家に行く。なんでも、西住家の家元である西住しほさんに俺達の事を話したら、是非遊びに来てと誘われたらしい。

千代「千歳く、優音く、愛里寿く。そろそろ行くわよく」

三人「はーい！」「」

それじゃあ、西住家に行きますかね。

はい、無事到着しました。移動は車です。え？飛ばしすぎ？気にするな。まあ道中特に何も起こらなかつたし、多少はね？強いて言うなら車の中で寝ちやつた愛里寿を俺が膝枕して、それを千歳と俺でひたすら愛でていたくらいかな。

え？今話してるの誰かつて？

転生した2人目の方だよ。

優音（ゆん）つてやつの方やで。

まあんなことは置いといて玄関まで来たけど

西住達の家でかくね？

何か和風のお屋敷みたいな見た目にデカさだな

アニメで少し見たことあるけどやっぱり実物は違うかく

千歳 「でかくね？」

優音 「クソでけえ」

愛里寿 「お家とあんまり変わらないと思うよ？」

千代 「ほら、3人とも中に入るわよ」

三人 「「はい」」

ガラガラ：

?? 「いらっしやいませ」

ん？このちっこいの二人は誰や？

千代「あら、お出迎えありがとう。まほちゃん、みほちゃん」

ああ！このちっこいの二人まほとみほか！

よく見れば面影あるなあ…

てかみほちよつと震えてるし…

この頃からこんな感じだったのか

まほ「ではお母様の所へ案内します」

千代「よろしくね」

それで俺達は廊下を歩いていった。

スタスタ…

しほ 「いらつしやい、今日はゆっくりして行ってね」

おおゝこの人が西住しほか。何か喋り方とか目つきとか丸い感じがするなあ。本編より若いからかな？

千代 「会いたかったわよろしほりん♡」

しほ 「ちよ、その呼び方は子供の前ではやめてって言ったでしょ…」

え？なに『しほりん♡』で。この2人ってそんな仲良かったの？

しほ 「コホン…じゃあ改めて私たちの家へいらつしやい、今日はゆっくりして行ってね」

ちよつとしほさんの頬赤くなってるやん。

千代「じゃあまずはお互い自己紹介をしましょうか」

しほ「ええ、じゃあまず千代からお願い」

千代「分かったわ、ほら3人とも自己紹介して」

とゆうわけでお互い自己紹介とかしてしほさんに「私達はお話があるから外で遊んでいいわよ」とか言って子供たちだけにされてしまった…

愛里寿「…あの…お二人はなにかご趣味はありますか…?」

まほ「戦車道を少々…」

みたいな感じのひつどい会話が続いた。さすがにこんな感じの会話が続くのはやだなあ…。しゃあない!ここは俺が先導してやるぜ!

優音「…皆で外に行かないかい?」

まほ 「外…ですか…？」

優音 「ああ。あんな子供っぽくない会話を続けるよりも
外で遊んだ方がまだ子供の俺達は楽しいんじゃないかと思ってね」

千歳 「そうそう。あんなの何も楽しくないじゃん。それにそんな畏まった喋り方しなくてもいいよ。なんか気持ち悪いし」

俺の考えに千歳も乗ってくれるが、後半の発言はちよつと失礼なんじゃないか……。
そう思っていたその時、みほが致命的な一言を言った

みほ 「わかった。でも外に出てなにをするの？」

千歳&優音 「……あつ」

やっべえ考えてなかった。うおおおお!!今までロクに使ってなかった脳みそをフ

ル回転させて考えるんだ俺!!

……………ダメだ思いつかん。ここは西住の2人に任せるか。

優音「そうだな…良かったら二人のお気に入り場所とかに連れて行って貰えないかい?」

まほは不思議そうな顔をしながら

まほ「お気に入り場所…か?」

優音「ああ。俺達はこの辺のことは知らないし何より遊びながらの方が二人のことを知れると思ってる?」

千歳「うんうん。俺達もつと二人の事知りたいんだ。だからお願い?」

愛里寿「わたしも二人の事もっと知りたい！」

まほとみほはお互い不思議そうな顔をしていた2人だが

、次第にクスクスとお互いに笑っていた

まほ「たしかにいい考えだな、じゃあⅡ号戦車に乗って行くでしょう」

それで俺達はⅡ号戦車に乗り込んだ。乗るのは合計5人で多いが子供っていうのもあつて、無事に全員乗れた。

ちなみにⅡ号戦車から見る熊本の景色はとっても綺麗だった。

俺達は西住達がよく行く駄菓子屋さんでお菓子などを買い2人がよく遊ぶ公園へとやってきた。そこで俺達は話や他愛ない遊びなどをした。ふたりとの会話はさつきまでのような感じではなく自然体で話していた。ちなみに愛里寿とみほはボコの話で盛り上がっていた。

皆夢中になつて遊んでいると空が赤くなつてきたので

西住家に帰ったら母親2人がて迎えてくれた。俺はさっきのような楽な話し方ではなく敬語で謝罪をした。

優音「すみません、自分たちはまだ子供なので外で体を動かした方がいいかなつと思つて外出しました」

それを聞いて何がツボだったのか千歳と愛里寿と母さんはクスクスと笑いしほさんは苦笑いをしていた。

その後俺達は帰る支度をし玄関まで向かった。すると西住しほ まほ みほが揃つていた

しほ「また遊びにきなさいね？」

まほ「またいつか会おう」

みほ「また一緒に皆で遊ぼうね」

なんてしほ まほ みほが言ってきた。それに対して俺達は、

千代「ええ、また来るわ」

千歳「そうだね。また来るよ！」

優音「ああ。また一緒に遊ぼう」

愛里寿「またいっぱい遊ぼうね！」

母さん 千歳 俺 愛里寿の順番で返して西住家を後にした。

3 『決意』

どうも、千歳です。

あれから2年が経ち、私と優音は中学に上がり、愛里寿は小4になりました。みほさんやまほさんとは別々の中学に行きましたが、今でも連絡は取り合っていますし、時々泊まりにも行っています。え？口調が変わってるって？それが1年前、私と優音が小6になった辺りから、喋り方に違和感を覚え始めたんです。初めはあまり気にしていませんでしたが、段々と男口調よりも女口調の方がしっくりくるようになったんです。まあ、優音は前から響みみたいな口調だったのであまり変わっていませんが……。あれですかね？どこかの鎧だけの弟さんが言っていた『魂（口調）が向こう（容姿）へ引つ張られてる』ってやつでしょうか。

まあそんな事は良いとして。

私達が中学に上がると同時に戦車道の訓練が始まりました。私達が使っている車輛

は『T-44』と言う、第二次世界大戦の末期にソ連が『T-34』の後継機として開発した中戦車です。お母さんが『中学校の入学祝いよ!』なんて言いながら渡してきたものですから、最初は唾然とさせられましたねえ。流星は戦車道の二大流派の内の一つなだけあります。

こんなに良い物を貰ったのですから、頑張らなければなりませんね!

やあ。優音だ。

今私と千歳は戦車道の訓練をしている。乗っている戦車は『T-44』で、私が砲手を、千歳が戦車長を担当している。

他にも操縦士は内海さん。装填手兼通信手は彩月さんが担当しているよ。

この2人とは中学での戦車道の部活で出会ってね。

元は仮のチームだったんだけどなんだかんだで仲良くなってそのまま正式なチームになったんだ。

内海さんはめんどくさがり屋で普段は全く働かないんだけど、試合になるととても頼もしくなるんだ。

彩月さんとはとても明るい子で持ち前のコミュニケーション力で通信手をしてもらってるんだ。もちろん装填手もしっかりしてくれてくれるよ。

まあメンバー紹介はこの辺で置いといて。

優音「ふうく…」

私は今狙撃訓練をしているよ。

距離は大体…1500mぐらいかな？

場所は開けた平原みたいところだね。

千歳「当てられそう？」

優音「うくん…微妙だね」

的を照準器から見るとすつごいちちちやいんだよね。
ほんと豆粒みたいな。

彩月「大丈夫大丈夫！優音なら当てられるって！」

内海「そうだね…きっと当てられるよ…」

優音「…何でわざわざハードルを上げてきたんだい？」

やばい。この二人のせいで気が散っちゃう…

優音「今から集中するから少し静かにしててくれないかい？」

彩月&内海「はい」

私は照準器を覗き見据える。

風は強めに吹いている

そして言葉を唱える。

優音『4つ数えて息を吸う。4つ数えて息を吐く。』

周りから音が消える。

戦車の排気音も皆の息の音も何もかも。

私の目にはもう的しか見えていない。

風が止んだ。

優音「ОГОНЬ」

85mm ZISS—S—53から発射された砲弾はまるで吸い込まれるように的に向かっていた

砲弾は的を貫いて的の後方で爆発した。

その後千歳はキューポラから身を乗り出し

双眼鏡を覗きながら呟いた。

千歳 「命中を確認」

優音 「よし」

彩月 「うおおおおお!!? すっごいじゃん優音!」

内海 「……すごい」

千歳 「分かってはいましたが、やはり凄まじいですね」

内海さんは信じられないものを見たような顔をして、彩月さんはとても嬉しそうな顔をしていた。

照れちゃうね…

でもさすがに今回は怖かったね。

さすがが集中力強化チートは伊達じゃない。

ちなみになんで戦車道の訓練をしてるかというと

今度中学校の戦車道全国大会があるんだ。

私たちがいる学校は戦車道で結構有名な学校でね。

全国大会にも何回か出てるんだけどいっつも惜しいところで負けてるからね。

やっぱり勝ちたいじゃん？

だから私達がなるべくキャリーしようと思つて今訓練しているんだ。

今はその最終調整。

彩月「これで明後日も楽勝だね！」

優音「慢心、ダメ、絶対」

彩月「えっ、あつ、ごめん……」泣き目

優音「え？あつ、いやそんな責めるつもりじゃなかったんだけど……」オロオロ……

彩月「冗談に決まってるじゃん、なに真面目に受けてるのよ」

優音「よし、表出ろ」

彩月「沸点低!?!」

そんなやりとりを千歳と内海は笑いながら見ていた

千歳「この調子なら大丈夫そうですね」

内海「そうだね…」

なーんて事をしながら日が沈むまで訓練を続けた。

そして試合当日…

司会「これより第46回中学戦車道全国大会を始めます！」

あつ、どうも千歳です。

今私は全国大会の控え室にいます。

しかし凄かったですよ。

なんせ参加してる学校がテレビとかにも出ている凄い有名な学校ばかりですからね。

そのおかげでチームの皆はかなり緊張しちゃってます。

顔も曇ってますね。

斯く言う私も結構緊張してます…

優音はどうしてr…:寝てる…?

肝が据わってますね…羨ましいです。

ああ…なんか緊張しすぎてお腹が痛くなってきました…

隊長「おーい皆大丈夫か？」

その時私達のチームの隊長が皆に声をかけてきました。

なんでしょうこんな時に…

隊長「ちよつと私から話したいことがあるから聞いてくれ」

隊長「今日は全国大会当日だ。皆が緊張するのも仕方が無いかもしれない、今回が初めてのも、今回が最後の者、プレッシャーを感じている者、色々いるかもしれない」

隊長「皆は全国大会という言葉に潰されすぎだ、全国大会だからどうした？恥ずかしい所を見せたくないのか？

学校に泥を塗りたくないのか？」

隊長「そんな考え捨ててしまえ。」

隊長「楽しめ。これは競技であつて戦争ではない。

お前らは何故この部活に来た？理由は様々あるだろうが少なからずお前らは戦車道が好きはずだ。訓練中の顔を見ればわかる」

隊長「しかもほら、楽しんで勝てたら最高じゃないか？だから緊張するのもいいが楽しむことを忘れるな？」

隊長「以上だ」

隊長の話聞いてた私達は少しの間ポカーンとしていた。ただど少ししたらみんな笑顔を浮かべて拍手をしていた。楽しむ…ですか…

確かに全国大会という言葉に押し潰されてて忘れていました。隊長のおかげで何か気持ちが悪くなった気がしますね。

隊長には感謝しなきゃいけませんね。

ところで優音は何してるのk…

優音「スピく…スピく…」

私は無言でお尻に向かって回転蹴りをした。

パーン！

優音「イツツツツ!？」

優音はお尻を擦りながら

優音「何するんだよ千歳！」

千歳「あなたが寝てたから起こしただけです」

優音「だからって蹴って起こす必要はないんじゃないかい!？」

千歳「こうでもしないとあなた起きないじゃないですか」

優音「流石に嘘だろ」

そのやり取りを見てる皆は笑っていた。
もう皆にはさつきまでのような表情は無かった。

やあ、優音だよ。
いやあ、NKTだった。

あと愛里寿と母さんが応援してくれてたのは嬉しかったね。

え？何が起こったのかわからないだつて？

しようがない、簡単に説明しよう。

まず結果から言うと私達の優勝だつたよ。

この優勝は結構隊長のおかげな気がするね。

実際隊長の話のおかげでみんなの士気が上がったり

的確な指示を出してたりしてたよ。

ちなみに私は1700mぐらいから敵を撃破したり

千歳の読みが凄かつたね。

まるで千歳が言った場所に敵が吸い込まれてるような感じだつたよ。

あつ、あと敵さんを助けたりもしたね。

その時川の近くで戦闘してて敵さんを撃破したら

砲弾がぶつかった時の衝撃で敵さんが落ちちやつたんだ。

それでこつちのみんなは急いで助けに行つたよ。

試合が終わって解散したあと、みほに『なんで敵を助けたの？』て聞かれたから、私と千歳は揃つて

『成すべきと思つた事をしただけだ（ですよ）』

そう言った。その時のみほは眩しい位の笑顔だったよ。

んまあ大会から少し経って

今私達2人は進路に悩んでるんだ。

正直あまりいいのがないんだよね。

ん？机の上に何か紙が置いてあるね。

こんなの置いた覚えはないけど？

優音 「千歳、この紙って千歳の？」

千歳 「いや、私のじゃないですよ？」

じゃあ愛里寿とかかな？

まあとりあえず読んでみよう。

紙の内容

お久しぶりです

最近上からお話がありまして、「この転生者は何もしてないじゃないか！」と言いまし
てお二人に課題が出されちゃいました。すみませんが「大洗女子学園を戦車道全国大会
で優勝させる」を達成してください。

ちなみに上が達成しないと「その世界の大切な人に不幸が来るぞ」

と言っていました。すみません、どうかよろしく願います。

神より

ほむほむ。

つまり大洗女子学園を優勝させないと家族を消すぞと。

いやなんでや。

おっと口調が…

いや、だって私達を殺した奴は地獄に落ちたんじゃないのかい？

まさか上が変わって私たちの事情を把握してないとか…

まあそんなことはどうでもいい。

そんなことよりこの『大切な人』、恐らく私たちの家族のことだろうね。

これだけは絶対に阻止しなきゃ行けないね。

とりあえず千歳にも見せよう。

優音 「はい、千歳」 サツ

千歳 「どれどれ…」

千歳 「……これはどういうことですか？」

うっわ…千歳がすごい怖い顔してる…

優音 「…そこに書いてあるとおりさ。大洗女子学園を優勝させないと母さんや愛里寿に何かが起こる」

千歳 「優音はどうするの？」

優音 「恐らくは千歳と同じ考えだね」

千歳 「でもお母様や私達に推薦をくれてる学校にはどう説明するの？」

優音 「推薦には適当に対応して母さんは話せばわかってくれるよ」

千歳 「根拠はあ r」

優音 「ない」 キリッ

千歳 「……………まあいいです。じゃあいつ説明するんですか？」

優音 「今」

千歳 「えっ」

こんばんは、千歳です。

今は午後10時、愛里寿は寝ている時間ですね。

今私達2人はお母様と話す為にリビングでお母様と向き合っています。

優音はどう説明するんでしょうか…

千代「で、相談って何かしら？進路のこと？」

優音「お見通しかい？」

お母様は微笑みながら

千代「だって二人とも何か緊張してるもの、物凄く分かりやすいわ」

凄いですね。

私達が話そうとしてることを当ててくるなんて。

優音「実は私達は『大洗女子学園』に進学したいと思ってるんだ」

千代「……その理由は？」

優音「理由？」

千代「そうよ？」

優音「……………」

まさか考えてなかったの!?

あんな(『ない』キリッ)とかやってたのに!?

どうするんですか…

千代「あなた達はそこに行つてやらなければいけないことがあるの?」

2人は頷く。

千代「私はね? 貴方達が理由を話さずに行動するには意味があると思つているの。

昔から貴方達はそういう事をするの。でもその行動には毎回意味があるのよ。

それは愛里寿だったりお友達のためだったり家族のためだったり…

だから貴方達の自由にしなさい。私は貴方達の親よ?

親が貴方達の道を決めてどうするのかしら?」

ああ…やっぱりお母様…島田千代さんには敵いませんね…

あつ、優音が泣いてる。

優音「ありが…とう…」グスツ

千代「私は当たり前のことを言っただけだと思っただけだ。」

あーもう優音。そんな泣かないの、もう高一なんだから
もつとシャキツとしてシャキツと！」

千代「ごめんなさい千歳。ちよつと優音を連れて行ってもらえる？」

この調子じゃ話を出来そうにもないから」

千歳「分かりました。あとお母様本当にありがとうございます」

千代「貴方まで…私は当たり前を言っただけよ？」

千歳 「その当たり前が私達からしたら嬉しいんですよ？」

千代 「貴方達の当たり前はどうなってるのよ…」

千歳 「ではお母様。おやすみなさい」

千代 「ええ。おやすみ」

私は泣いている優音を連れて部屋を出た。

寝室に向かう途中の廊下で優音は話しかけてきた。

優音 「…ねえ千歳」

千歳 「何？」

優音 「私達の家族をどう思う？」

千歳 「そうですね…これ以上にならない最高に素敵な家族だと思えますよ?」

優音 「守らなきやね…」

千歳 「ええ。絶対に」

そう私達は決意し、互いの拳を打ち付けた。

4 『入学』

どうも。お母様から大洗女子学園入学の許可を得た私こと千歳と優音です。

あれから私達は各高校から来ているオファーを全て断つていきました。聖グロリアーナやサンダース、継続にプラウダ……。いやあ、どの校も中々諦めてくれなかったので苦労しました。特にプラウダは私達がソ連戦車を使っているという事で何度も交渉してきました。まあその度に断つて、やっと諦めてくれましたが。

それと私達が各高校からのオファーを断っている間に、愛里寿にもオファーが来ていました。それも大学からです。これにはお母様もびっくりしていました。まあ流石に小学生を大学に入れるのは無理があるのでお母様が断っていました。でも小学生である愛里寿が大学からオファーを貰うなんて凄いです！愛里寿も頑張っていたのですねえ。

(因みにそのあと千歳と優音で愛里寿の頭をナデナデしたら愛里寿が甘えて千歳、優音の順に顔をお腹に埋めてきた為に二人が愛を嘖き出して悶絶したのは別のお話)

やあ、優音だ。

各高校からのオファーを全て断ってから数ヶ月が経ち、一週間後に私達は実家を離れて大洗女子学園がある学園艦に移ることになった。

現在私達はその事を母さんと愛里寿に伝えた所なんだが、

愛里寿「やだ、やだ！千歳お姉ちゃん優音お姉ちゃんと別れるなんてやだあ！」

こんな感じに愛里寿が泣き出してしまったんだ。困ったね。姉としてはすごく嬉し

いのだけど。

千代「愛里寿、我が儘を言っちゃだめよ？それにずっと離れている訳じゃないんだから。ね？」

愛里寿「嫌だあ！千歳お姉ちゃんと優音お姉ちゃん一緒にいたいよお」グスツ

うーん。母さんでもだめかあ。どうしよう、私は泣いてる子をあやしたことなんて無いし。

千歳「愛里寿」

愛里寿「グスツ……エグツ……千歳お姉ちゃん？」

千歳が愛里寿に話しかける。私が千歳の顔を見たとき、千歳はまるで母親のような優しい笑みを浮かべていた。

千歳「大丈夫ですよ。確かに私と優音は暫くここを離れますが、ずっとではありませ
ん。夏休みや冬休みにはちゃんと帰ってきます。だから、泣かないで？」

千歳は愛里寿を安心させるために愛里寿と目線を合わせて喋る。

愛里寿「……ほんと？」

千歳「ええ。本当です」

千歳はそう言い、愛里寿を優しく抱き締める。

千歳 「では私達は荷物の準備がありますので、これで失礼させていただきます」

千代 「ええ。おやすみなさい千歳、優音」

千歳&優音 「お休みなさい（お休み）、お母様（母さん）」

く自室にてく

優音 「なあ、千歳。一つ聞きたいんだが」

千歳 「なに？ 優音」

優音「さつき愛里寿をあやしていたところを見て思ったんだが、お前はなぜあそこまで慣れていたんだ？」

千歳「前世で私には弟がいたからね。弟がまだ幼くて泣きじゃくってた時によくああやってあやしてたの」

優音「お前、弟がいたんだな」

千歳「ええ。手の掛かる弟でした」

はい、千歳です。

大洗女子学園に入学して一週間が経ちました。入学した日にお母様から入学祝いにとt-44用の100mm砲が届いたので驚きました。以前にもこんなことがありましたねえ。その週の休日に砲を換装し、私達の愛車は

〔T-44-100〕になりました。流石に気分が高揚します。

まあ、この学校にはまだ戦車道がありませんので、もう1年待たなければ試し打ちは出来ませんが。あ、t-44-100は寮の近くにある専用のガレージに閉まっています。

まあそれは良しとして。現在は午前7時。もうすぐ登校の時間なのですが、優音がまだ起きてくれません。

千歳「優音、起きて。7時過ぎたわよ？」ユサユサ

優音「うーん……あと2時間……」モゾモゾ

千歳「寝過ぎです。早くしないと遅刻しますよ」

優音「うう……分かった」ムクツ

はあ、やっと起きてくれました。

優音「ふあく……おはよう、千歳」

千歳「おはよう優音。ほら、顔洗っておいで」

優音「分かった」

そう言うのと優音は若干フラフラしながら洗面所に向かっていった。

やあ、優音だ。

顔を洗ったら眠気が吹き飛んだよ。水って素晴らしいね。

そんなことより、今私と千歳は朝ごはんを食べ終えて登校中だ。ちよつと起きるのが遅れたけど、遅刻する程ではない。

おや？

優音「千歳。前の方にフラフラしながら歩いている子がないかい？」

千歳「え？ うーん……ああ、本当ですね。確かにいます」

「どうやら千歳にも見えたらしい。」

優音「もしかしてあの子、〃冷泉麻子〃じゃないかい？」

千歳「そうですね。しかし、実際に見るとほんとに辛そうですね。大丈夫でしょうか」
確かにそれは私も思った。私達は前世であの光景をアニメとして見ていたが、いざ目の前で見てみるとかなり辛そうにしているのが分かる。

優音「どう見ても大丈夫ではないね。あのままじゃ危ないし、学校まで肩を貸してあげよう」

千歳「分かりました。ではいきましよう」

千歳はそう言い、麻子に近づき話しかけた。

千歳「あの……大丈夫ですか？」

はい、千歳です。

流石にあんなにフラフラしていると心配になってきましたので、声を掛けてみました。

千歳「あの……大丈夫ですか？」

麻子「……つらい」

私の問い掛けにぼそりと答えて、『朝は何故来るんだ』と恨みがましい言葉を吐き出す

麻子さん。

どうやらかなりの低血圧らしい。このままにするのはあまりよろしくありませんね。助けましょう。

千歳「肩を貸すのと背負うのとお姫様抱っこ、どれが良いですか？」

麻子「……………背負うので」

千歳「分かりました。では……………はい、乗ってください」

麻子「……………うん」

千歳「ん…しよつと。優音。悪いけど荷物持ってくださいない？」

優音「ああ、分かった」

背中に背負うと、女の子特有の柔らかささと暖かさ、そして仄かにいい香り。

それにしても軽い、軽すぎる…ちゃんと食べてるのか不安になる軽さだ。

麻子「…すまん、恩に着る…：…ぐう」

優音「寝ちゃダメだよ？」

いきなり寝の態勢に入る、本当に大丈夫でしょうかこの子。

「冷泉さん！貴女朝から何してるのよ!？」

校門前で風紀委員に止められました。

麻子「…うるさいぞ、そど子」

そど子「そど子言うな！友達に背負われて登校なんて風紀違反よ！貴女達も、冷泉さんを甘やかしちや駄目じゃない！」

親切したら怒られたのですが（困惑）。

聞けば、冷泉さんは入学以来連続で遅刻をしているらしい。

今日は私達のお蔭で間に合ったのですが風紀委員的には遅刻扱いらしいです。可哀
想に。

麻子「助かった。お前達、名前は？」

そう言えば名乗っていませんでしたね。

千歳「私は島田千歳です」

優音「同じく島田優音だ。よろしく頼む」

麻子「千歳さんに優音さんか。本当に助かった。私は冷泉麻子。この借りはいつか必ず返す」

麻子さんはそう言うのと一人校舎に入っていた。

そしてこの後麻子さんの友達の武部沙織さんにお礼を言われたて友達になったり、その沙織さんの友達である五十鈴華さんとも友達になったり、来年共に戦車道をする秋山優花里さんと廊下ですれ違ったり（以外にも私達を見ていなかったのか気付かれなかった）、放課後に『バレエ部を立ち上げよう』と磯辺典子さんに勧誘されて丁重にお断りしたりしたのですが、それは別のお話です。

5 『夏休み』

やあ、優音だよ。

入学してからまた少し経ったよ。

今は夏休みで愛里寿との約束通り私と千歳は今群馬の家に帰ってきてるんだ。

本当は五十鈴達も誘ったんだけど、五十鈴は実家に帰る予定があつて冷泉と武部は冷泉の実家に用があるって断られちゃったんだ。運が悪いね。

という訳で今和室でくつろぎながら愛里寿と話をしているよ。

ちなみに千歳は隣で昼寝しているよ。

多分疲れていたんじゃないかな？

愛里寿「お姉ちゃんたちの学校ってどんな感じの所なの？」

優音「う〜ん…特にそこら辺の学校と違わないよ。強いて言うなら個性的な人が多いぐらいかな」

いや、本当に。

愛里寿「例えばどんな人がいるの？」

優音「例えば朝はゾンビみたいな人がいたり、もんの凄い勘違いをしてる人とか…後は見た目に合わずすごい大食いの人とかね」

五十鈴の大食いなんか最初見た時はびっくりしたね。

事前に知ってはいたけどもいざ目の前で見ると凄かったよ。

愛里寿「ほんとに個性的だね…」

千代「みんなご飯できたわよ」

愛里寿・優音「はーい」

私は千歳を起こして食卓へ向かった。

ちなみにご飯はハンバーグだったよ。

くその日の夜く

どうも、千歳です。

今私は和室でお母様と話しています。

実は今朝昼寝をしちやいましてあんまり眠くないんですよ…

なのでお母様と話すいい機会かなと思つて話しています。

千代「ところで千歳。夏休みこれからどうするの？」

そう言われると決めてませんでしたね。

どうでしょうか…五十鈴さん達は今用事で無理ですし…

千歳「まだ決めてないですね」

千代「なら学園艦にでも行ってみたら？」

あつ、いいですねそれ。

採用です！

別に優音に話さなくてもあの子なら逆に喜ぶでしょう。

千歳「じゃあそうしますね」

千代「ならどこの学園艦に行くの？」

そうですね…

…アンツイオとかどうでしょうか？

あそこならすぐに馴染めそうですし。

決めました！

千歳 「アンツイオに行きたいと思います」

千代 「そう。それで、いつ出るの？」

千歳 「明日には出ようと思ってます」

だつて早く行きたいじゃないですか！

千代 「たまに貴方達って男の子みたいなこと言うわよね…まあいいわ、気をつけて行つてらっしゃい」

千歳 「ありがとうございます！お母様！あつ、それよりも学校で面白いことがあつたんですよ！この前…」

その後も私とお母様はしばらく他愛もない話をしていた。

おはよう、優音だ。

今はヒトマルマルマル。

私達二人は朝ごはんを食べて学園艦へ行く準備をしているところだよ。

いや、驚いたよ。

朝起きて歯磨きとかしてたら千歳が急に「アンツイオ行こう！」とか言い出して何言ってるんだこいつって顔をしちやっただよ。

でもまあ確かに夏休みやることないからちようど良かったけどね。

地味にアンツイオの料理とか楽しみでワクワクしてるよ。

千歳 「優音、準備出来た？」

優音 「大丈夫だよ。」

千歳 「よし！じゃあ行きましようか！」

優音 「張り切ってるねえ〜」

千歳 「ではお母様、行ってきますね」

優音 「じゃあ行ってくるよ」

千代 「ええ、二人とも向こうに迷惑かけないようにね？」

愛里寿 「行ってらっしゃい！またお話いっぱい聞かせてね！」

それで私達は家を出て電車に乗ってアンツイオの学園艦へ行ったよ。

という訳でアンツイオの学園艦に着いたよ。

いや、ちようど物資の補給で寄港してたから良かったよ。

何で事前に調べとかないのかな？

まあいいや。今はアンツイオの街中を歩いてるんだけど

凄いな。なんというかザ・ヨーロッパみたいな街並みしてるよ。

民家に石を使っていたりしてて日本では見れない光景だね。ここ日本やん…

千歳「優音！このフレッシュパスタ美味しいよ！」

優音「Хорошо。これは美味しいね」

今は千歳と一緒に食べ歩きをしてるよ。

この屋台で買ったフレッツシユパスタがすごく美味しいんだ。

シンプルなトマトソースだけどそこがまたいいんだ。

ん？あれは？

？「鉄板ナポリタンはいかが？！」

セモヴェンテの屋台に鉄板ナポリタン…

ペパロニ「おっ！そこのお嬢さんたち！鉄板ナポリタンはいかが？」

ペパロニだー！

容姿とかも完全に一致してるし間違いないね。

しかしパスタにパスタか…ちよつとき…

千歳「じゃあ二つ貰えますか？」

優音「いや何勝手に買ってるんだい？」

千歳「じゃあ食べないの？」

優音「いや食べるけどね？ちよつと声かけるぐらいしよう？」

千歳「ほら、今から調理始まるよ？」

優音「はあ…」

ペパロニ「ん？もう始めていい？」

優音「大丈夫だよ……」

ペパロニ「ほい！じゃあまずオリーブオイルはケケケチしない。具は肉から火を通す。今朝とれた卵をトロトロになるくらい。ソースはアンツィオ高秘伝トマトペースト。パスタのゆであがりとタイミングを合わせて……はい！300万リラ！」

優音「何時の為替レートだい？」

ペパロニ「いい返しだねえお客さん、本当は300円だよ！」

千歳「かなり安いですね」

ペパロニ「だろ？それでも赤字ギリギリだけどな！」

いや、ダメじゃないか。

千歳・優音「（ざ）馳走様でした」

ペパロニ「毎度あり！また来いよ！」

千歳「ええ！是非！」

優音「またいつかね」

何か無駄に疲れたね…

でも美味しかったから結果的に良かったかな。

千歳「あつ！あそこにも美味しそうな屋台があるよ！行こうよ優音！」

千歳「ってこんな食べたっけ？私はもう結構きついんだけど…」

まあいいか。

優音 「いいよ。ただ私は食べないからね？」

それではしばらく2人で食べ歩きを続けた。

千歳 「いやー沢山食べましたね」

優音 「どこにあの量が入ってるんだい？」

どうも千歳です。

今は食べ歩きを終えて2人で公園のベンチに座って休憩しているところです。

この公園もすごい綺麗ですね。日本にはないような感じですよ。

しかし優音はそう言ってますが私としてはそんなに食べてないと思うんですが…

あれ？なんか向こうの方で誰か悩んでいますね？

？「あーもうどうしよう…」

ちよつと行きましようか。

優音「？どうしたんだい？」

千歳「ちよつと向こうの人に話しかけてきます」

あれ？あの人よく見たらアンチョビさん？

髪型だってドリルツイントールですしあのツリ目…
間違いなくアンチョビさんですね。

しかしどうしたんですしよ…

千歳「あの一どうしたんですか？」

アンチヨビ「ん？誰だ？」

ほえ〜これが生アンチヨビさんですか：

ってそんなことを考えてる場合じゃない！

千歳「あつ、えーと…千歳って言います」

アンチヨビ「千歳か、私はアンチヨビだ。それで私に何か用か？」

千歳「なにか悩んでるようでしたので何があつたのかなあと」

だつて頭抱えて体を捻りながら唸ってるんですもん。

そりゃどんなことが起きたのか気になるじゃないですか。

アンチヨビ「ああ…この学校に戦車道があるのは知ってるか？」

千歳「はい。イタリアの戦車を使ってるんですたよね？」

アンチヨビ「そうだ。実は近々戦車道全国大会があるんだ。そのために今は戦車道の練習にも気合が入ってるんだが今日メンバーの2人が休んでしまつてな…普通ならその2人の仲間は休みなんだが大会があるから練習をさせるために先輩が探して来いって行つてきてな。それでどうするか悩んでたんだ」

練習ですか…

でもちようど2人お休みなら私達で協力できるんじゃないですか？

千歳「ねえ優音、これ私たちで協力しない？」

優音「まあいいんじゃないかい？たまには練習しないと腕が鈍っちゃうちょうどいいと思うよ」

よし、決まりですね。

千歳「アンチヨビさん、それ私達にやらせてくれませんか？」

アンチヨビ「いいのか？つて言うか戦車道出来るのか？」

千歳「ええ、一応嗜む程度にはやってますよ」

アンチヨビ「本当か!?ありがとう!本当に助かる!」

すっごい笑顔で顔近づけて来ました…

でも可愛いので結果オーライです。

アンチヨビ「千歳達が担当するのは車長と砲手だが大丈夫か？」

千歳「問題ないです。ね?優音」

特に理由もない振りが優音を襲う！

優音「なんで私に振ったんだい？まあいいや…大丈夫、私も問題ないよ」

アンチヨビ「ありがとう二人とも！あつ、そう言えばもう1人の方の名前を聞いていなかったな、なんて言う名前なんだ？」

優音「優音（ゆん）だよ」

アンツイオ「優音か…分かった！じゃあ千歳、優音ついて来てくれ！」

私達二人はアンチヨビさんの後ろについて行った。

やあ、アンチヨビだ。



今私達は戦車のある倉庫にいるぞ。

いやあでも良かったあく代わりの人見つけられてく

でも大丈夫か？一応戦車道はやってるとは聞いたがどのくらいできるか聞いてな
かったな…

おつ、着いたな。

アンチヨビ「これが2人に乗ってもらおう戦車、セモヴェンテだ！」

千歳・優音「ホツ…」

アンチヨビ「ん？どうしたんだ二人とも？」

千歳「いや、もしかしてCV33に乘せられるんじゃないかと心配してて…」

優音「もしカルロ・ペローチエだったら私達無能になってたからね」

こういうことか…

アンチヨビ「実は最初はそうしようと考えてたんだがカルロ・ペローチエは結構普通の戦車とは感覚が違うからな」

アンチヨビ「そこでさすがにいきなりは無理だろうと思ってセモヴェンテにしたんだが正解だったな」

操縦手の事とか説明後…

アンチヨビ「それじゃあそろそろ試合の説明をするぞ」

アンチヨビ「今回戦う場所は中央に崖があつて右の方に崖に登るところがあるところだ。チーム分けは5対5、ルールは大会を意識してフラッグ戦、フラッグ車は私の乗っているセモヴェンテだ。」

アンチヨビ「実は相手は全員3年生でな…来年は私がリーダーだからそのためだ」とか言つてこうなつたんだが正直勝てる気がしないんだよな…」

正直1年の差なんて大したことないと思うだろうが私的にはかなり差があると思う。

部活をやつたことあるならわかると思うが1個上の先輩には勝てないだろ？あれと同じだ。

しかし本当にどうするか…

千歳「アンチヨビさん」

アンチヨビ「なんだ？」

千歳「今回私に指揮権を譲ってくれませんか？」

え？

アンチヨビ「え？」

しまった、驚きすぎて思わず声に出してしまった。

でもいくらピンチを救ってくれたとはいえさすがにそこまでは出来ないな…

千歳「お願いします」

アンチヨビ「いくらなんでもそこまでは…」

千歳「信じてください」

今日会った人に信じろなんて無理な話だが…

いい目をしてるな…しようがないか。

アンチヨビ「分かった…他のメンバーにも伝えとくぞ」

千歳「本当にありがとうございます！」

アンチヨビ「代わりにヘマはするなよ？」

千歳「もちろんですよ」

まあ信じてみるか…

あれ？これって私達の強化練習のはずだよね？

やあ優音だよ。

今は試合場所のスタート地点だ作戦の最終確認をしているところだ。

実はさつきペパロニに会ってね。

今回私達が参加することを教えたら喜んでくれたよ。

ちなみに試合会場はWOTの崖そのまんまだよ。

千歳「では最終確認をします。こちらの編成はCV33が3両、セモヴェンテが2両、敵さんの編成はこちらと同じで、フラッグ車はアンチヨビさんが乗るセモヴェンテです。まず試合が始まったらフラッグ車を一応CV33の護衛をつけて丘の下に行きそこに来ている敵を崖の上に逃げるふりをして後退してください」

千歳「敵さんは引き付けには気づくと思いますが恐らく崖の上にも何両か出していると思うので、このまま行けば挟撃になるのであえて乗ってくると思います。そのタイミングで全車両で崖の下を全力で抜け、敵フラッグを叩きます。勿論フラッグ車も一緒に」

アンチヨビ「なあ…相手が乗らなかつた時どうするんだ？」

確かにもっともな意見だね。

でも…

千歳「はい、相手がもし乗らなかつたら私が崖から降りて相手の裏から行くつもりですがまあ乗らない可能性は低いと思いますよ？なぜならここはアンツイオ、ノリと勢いの学校ですからね」

確かにノリと勢いは時として強い時もあるし弱い時もある。

勢いでいってもダメな時はダメなんだ。

アンツイオ「分かった、信じてるぞ」

千歳「こちらからです」

優音「そろそろ乗り込もうか」

千歳「そうですね。じゃあ皆さん！各自戦車に搭乗して下さい！」

千歳がみんなに呼び掛けて全員戦車に搭乗したタイミングでアナウンスが流れた。

アナウンス『これから、1、2年生対3年生の試合を始めます。各員、礼！』

各員『よろしくお願いします』

千歳「それでは皆さん！作戦開始です！戦隊出撃！」

アンチヨビが敵を誘き出すために待っている途中で：



アンチヨビ「うう…何だかんだ言つときながら本当に成功するのか不安になってきたぞ…」

今アンチヨビはG2地点にいる。

だつてよくよく考えたらちよつと頭を捻った馬鹿凸じゃん…
流石に無理だろ…

操縦手「信じてるぞとか言つてたくせにどうしたんですか」

アンチヨビ「うるさい！あの時はホントにいい作戦だと思つていたんだ！でも頭を冷やしてみるとめちやくちやな作戦だと思つてな…」

砲手「でも私はいいい考えだと思いますけどね…だつて全員で突撃つて単純で楽しそうじゃないですか？ペパロニさんも単純でわかりやすいつて言つてましたよ」

アンチヨビ「そんなので勝てたら苦労しないよ…」

これで勝てたら土下座してやる！

砲手「！敵戦車の土煙を発見！正面です！」

来たか…

アンチヨビ「了解だ、相手が私たちを確認したらH4辺りまで引いてアンブツシュ組に連絡だ」

砲手・操縦手「了解！」

砲手「アンチヨビさん！敵のCV33が2両追いかけてきました！」

アンチヨビ「本当に乗ってきたのか…」

そのままアンチョビのセモヴェンテは敵のCV33に背を向けて崖の上に逃げるふりをした。

H4 地点

こんにちは、千歳です。

今さつきアンチョビさんから通信が来てこつちに敵さんを無事に釣れてるようです。実は釣れるか心配だったのですが私の杞憂でしたね。

優音「そろそろ来るんじゃない？」

千歳「そうですね、『皆さん、そろそろ戦闘の準備をしてください』」

ペパロニ『よーし！任してくださいよ！』

千歳『カルパッチョさんも大丈夫ですか？』

カルパッチョ『はい、準備完了です！』

あ、そう言えばカルパッチョさんのことを言っていないませんでしたね。

カルパッチョさんとは作戦を皆さんに説明する時に知り合つてですね、そこで少し話してそれでお互い気が合つたようで仲良くなりました。

カルパッチョさんはこの学校の中でまともな方で

そのせいで結構苦労してるみたいです…

ちなみにカルパッチョさんはCV33に乗ってます。

意外ですね。

優音 「千歳、アンチヨビさんのセモヴェンテが見えたよ」

来ましたか…

千歳 「じゃあ皆さん！作戦開始です！全車両突撃！」

こちら側の全車両が崖の下に向かって全力で進んでいます。

アンチヨビ 『相手のセモヴェンテが崖の上から撃つてく…あれ？』

千歳 『どうしました？』

アンチヨビ 『いや、普通なら崖の上からうってくると思うんだが撃つてこなくてな…』

そういうことですか。

千歳 『この崖って結構急じゃないですか?』

アンチヨビ 『そうだな…まさか俯角が足りない?』

千歳 『そうです、しかも私達は崖にかなり寄って進んでいるので余計ですね、まあそれならちよつと乗り出せば俯角はどうにかかりますけどね』

まあ代わりに落ちる可能性がありますけどね。

ドオオオオオオオオオオオオオオオ!

千歳 「なんの音ですか!？」

アンチヨビ 『上からカルロ・ペローチェが2両、セモヴェンテが1両降ってきたぞ!!』

うっそ?!いくらノリと勢いがいいからってそんなことまでするんですか!？」

アンチョビ『おい、撃ってきたぞ!』

そりやそうでしょうね!

千歳『CV33組さん! 足止めをお願いします! ただ、捨て身の特攻じゃなくて気を散らす程度で大丈夫です!』

CV33の搭乗員『了解です!!』

3両のCV33が敵車両に向かって駆けていく。

ペパロニ「オラオラー!! こっちを見やがれ!」

カルパッチョ「ペパロニ大丈夫なんですか!？」

ペパロニ「このペパロニ様に任せろ!」

敵セモヴェンテ「クソツ！鬱陶しいな！喰らえ！」ドーン
！

ペパロニ「へへっ、そんな弾当たらないっすよ！」

うわあ…あんなちよこまかと動かれたらウザイでしょうね…

千歳『アンチヨビさん！ペパロニさん達が気を引いてるうちに行きましょう！』

アンチヨビ『分かった！』

千歳とアンチヨビは敵フラッグ車があるのであろう場所に向かった。

敵フラッグ車『おい！奇襲は上手くいったか？』

敵セモヴェンテ『ダメです！CV33に遊ばれてます！』

マジか…このままじゃこつちに来てしまうな…

アンチヨビ『敵フラッグ車を発見！護衛はない！』

お、ようやくだね。

千歳『了解！そのまま動きながら砲撃して気を引き付けてください』

アンチヨビ 『あんまり長い時間引き付けたら撃破されるぞ?』

大丈夫。

千歳 『大丈夫です。その前に仕留めます』

千歳 「大丈夫ですよ? 優音?」

そんなの決まってるじゃないか。

優音 「もちろんだよ」

アンチヨビ 『うおおお!! こつちを見ろおおー!』

アンチヨビさんが凄い頑張ってるね。

これは期待に応えなきゃ。

千歳「よし！戦車を停止してください！」

戦車がブレーキをかけ一瞬安定する瞬間：

優音（ここだね）

打ち出された砲弾は敵セモヴェンテの戦闘室の正面左横に着弾。

それと同時に白旗が上がった。

アナウンス『敵フラッグ車走行不能！1、2年生チームの勝利！』

私たちの勝利だ。

試合の後、アンチヨビさんに宴会に誘われて一緒に楽しんでるよ。



このピザ美味しい。

アンチヨビ「そういえば千歳、何であんなに上手くいったんだ？」

千歳「ああ、その事ですか。それはですね、こういう勢いのある作戦の方がいいかなと思ったからです」

アンチヨビ「なんでそう思ったんだ？」

千歳「アンツイオはノリと勢いがすごいですからね。そういう作戦の方がいいと思っただけです」

アンチヨビ「よくうちの学校を知ってるな」

千歳「ちよつと興味があつて調べたことがあるんで、それですね」

まあ原作知ってるからなあ…

ペパロニ「姐さん達！ここにいたんすね！」

カルパッチョ「ちよつとペパロニ！急に走らないでくださいよ！」

ペパロニとカルパッチョが走ってやってきたね。

2人とも息が切れてるけどそんなに走ったのかい？

優音「2人ともどうしたんだい？」

ペパロニ「いやー今日協力してくれた姐さん達にお礼がしたくて…」

いい子だ…

今私の中でペパロニの株が急上昇してるよ。

カルパツチヨ「今日は本当にありがとうございます」

ペパロニ「ありがとうす！」

アンチヨビ「そう言えば私も忘れてたな…改めて今日は協力して更にはうちのチームを勝たせてくれてありがとう」

千歳「いえいえ、私達はやれる事をやっただけですよ」

優音「それにいい練習にもなったしこっちから感謝をしたいぐらいだよ」

流石に来年まで練習サボつてると腕が落ちるからね…

だから今回の練習試合はちょうど良かったんだ。

アンチヨビ「そう言ってくれるとありがたい…がそれだどこっちの気が済まないんで

これからもちよくちよく遊びに来てくれないか？」

ペパロニ「姐さんいい考えっすね〜」

カルパッチョ「私も来てくれたらありがたいです」

これは断る理由が見つからないお誘いだね。

千歳「是非行かせてもらっていいですか？」

優音「私も同じだよ」

アンチヨビ「ああ！何時でも来い！歓迎してやるぞ！」

この後も宴会は日が沈むまで続いた。

く港にてく

優音だよ。

実は意外とアンツイオに長く滞在しててもう夏休みが残り少ないんだ。

だからもう帰らないといけないんだよね。

アンチヨビ「もう帰っちゃうのか…」

ペパロニ「また来てくださいよ！」

カルパッチョ「また一緒にお話しましょうね！」

千歳「ええ、絶対にまた来ます！」

優音「その頃にはアンチヨビはリーダーかな？」

アンチヨビ「つまり一年後ぐらいか…まあ会えないわけじゃないからいいか！正直連絡先も交換したからいつでも喋れるしな！じゃあまた今度会おうな！」

千歳「勿論です!!」

優音「ああ、またいつかね!」

その後私達はアンチヨビさん達と別れ、帰りは電車に乗って大洗に帰った。

その後の家には宴会の時撮ったアンチヨビ、ペパロニ、カルパッチョ、千歳、私が全員笑顔で撮られてる写真が飾ってあった。

6 『決勝戦』

どうも、千歳です。

夏休みが開けて9月に入りました。この時期は戦車道全国高校生大会があり、何かと賑やかな時期なんですよねえ。

で、現在私と優音はお母様や愛里寿と一緒にその大会を見に来ています。今は準決勝が終わって、もうすぐ決勝戦の黒森峰女学院対プラウダ高校戦が始まるところです。私と優音は原作を知ってるのでこの後の展開を阻止しようかなとか思いましたが、現実は残酷でした。確かに止めることは可能なんです、下手をすると怪しまれるので出来ませんでした。

優音「……千歳……」

千歳「……ええ……」

優音も浮かない顔をしていた。

それもそのはず、これから黒森峰女学院がプラウダに負けて負けたのはみほさんのせいでと言われ叩かれるんですから。

アナウンス『これより黒森峰女学院対プラウダ高校の決勝戦を始めます！一同、礼！』
さて、いよいよですね…

アナウンス『プラウダ高校の勝利！』

試合は原作道理に進み、フラッグ車のみほさんが川に落ちた味方さんを助けようとして川に飛び込み、その際に

撃破されて終わりました。

優音 「千歳。みほに会いに行こう」

そうですね…

ここで少しでもフォローしてあげた方がみほさんのダメージも減るでしょうし。

千歳 「ええ。じゃあ行きましようか」

そう言い、私達はみほさん達がいる場所に向かった。

……初めまして。西住みほです。

現在試合が終わり、みんなで集まっているところです。ですが、皆さん私の事を見ています。

……理由は分かっています。私がフラッグ車から降りたからです。でも、私は後悔していません。仲間を助けるのは当然だから。

それに千歳ちゃんや優音ちゃんが中学生大会で助けてましたしね。

でもマスコミとかエリカさんと赤星さん以外の同学年に何か言われそうだなあ（エリカには危険な行動をしたことを怒られ、赤星さんにはお礼を言われている）。

私は今お姉ちゃんと二人きりで話しています。

まほ「それでみほ。何故あの様な事をした？」

みほ「お姉ちゃん……」

まほ「あれは下手をすればお前が危険な目に遭ったかもしれないのだ。何故だ」
みほ「それは……」

いざ言おうと思うと言葉に詰まる。でも……

いや、ダメだ。ここで言葉を選んでちゃ。

私の正直な思いを言おう。

みほ「私は……怖かったの……もしかしたら死んじゃうんじゃないかって……」

私はお姉ちゃんの眼をまっすぐ見つめながら言った。

みほ「確かに私も危なかったけど目の前で何もせず見てるだけの方が嫌だった。もしそれで赤星さん達が死んじゃったら悔やんでも悔やみきれないから……後悔をしたくなかったの……」

確かに川に落ちただけじゃ死なないかもしれない。
でも絶対とは言いつれないから私は助けにいった。
後悔はしたくないから…

まほ「……ふふっ…」

え？なんでお姉ちゃん笑ったの？
私そんなおかしいこと言った？

みほ「お姉ちゃん？」

まほ「ああ、すまない。あまりにもみほらしい考えでな」

私らしい考え？

まほ「まあそれは良い。兎も角、次からこの様な事はしないように」

「お姉ちゃんがそこまで言うとは、」

千歳「みほさん、お疲れ様でした」

優音「みほ、お疲れ」

高校入学以来会っていないなかった千歳ちゃんと優音ちゃんが声を掛けてくれた。

千歳「みほさん、お疲れ様でした」
優音「みほ、お疲れ」

私と千歳は黒森峰の生徒達の死角になる位置に来てそう言った。当然生徒達は驚き私達の方を向く。

みほ「千歳さんと優音さん!？」

まほ「どうしてここにいるんだ？」

二人とも驚いた顔をしている。

千歳「みほさんとまほさんの試合があるから見に来ただけですよ」

優音「私達がここに来た理由は応援しにきたついでに会いに来たんだ」

まほ「それに何故今回の大会に出なかつた？お前達なら出てくると思つたんだが」

千歳「まあ、それには色々ありまして……」

優音「まあかくしかじかあつたんだよ」

みほ「かくしかじかじゃあ……」

だつて神様に頼まれたなんて言えないじゃないか。
そりやはぐらかすしかないだろう。

まほ「まあ、大方他の人には言いたくないことなんだろう？無理に理由を話す必要もない。と言うか優音。お前の説明かなりふわふわしているな」

何かまほが丸いね。

エリカ「え、待つてください隊長、千歳さんや優音さんつてまさかあの人たちですか？」

まほ「……ああ、二人がああ『白い死神』の二人だ」

みんな驚いたような顔をしてるね。……ん？ちよつと待つて！

エリカ「えっ！隊長知り合いなんですか」

まほ「まあ、小学生からの付き合いだしな」

優音「それよりも、『白い死神』と言うのは何だい？」

まほ「知らなかったのか？戦車道を嗜むものの間ではかなり有名だぞ？『何処に隠れていようと必ず撃ち抜く、消して姿を見せない白い死神』。戦車道界ではこう呼ばれている」

え、めっちゃ恥ずかしいね…

誰だい？そんな中二病が考えそうな異名をつけた人は？

優音「そ、そうか。おっと、そろそろ行かないと」

千歳「え？もうそんな時間でしたか。ではまほさん、みほさん、またいつか」

まほ「ああ、また」

みほ「千歳ちゃん、優音ちゃん、またね」

私達は互いに手を振り、それぞれ別れる。が、

千歳「あ!? 良い忘れていた事がありました！」

千歳が何かみほに言うのを忘れていたらしい。そして千歳はみほの所へ戻っていった。

千歳 「みほさん！」

千歳ちゃんが走ってこちらに戻ってきた。何かな？

みほ「千歳ちゃん、どうしたの？」

千歳「はあ、はあ……みほさん、貴女に伝え忘れていた事がありました」

伝え忘れていた事？

千歳「みほさん。今日の試合で貴女がやったことは、決して間違った事ではありません。あれは人として至極正しい選択です。自分に自信を持ちなさい」

そう言い、千歳ちゃんはまた戻っていった。

そして私は、千歳ちゃんの言葉に胸の奥を熱くさせられた。

設定

設定

— 主人公 —

名前 : 島田千歳

所属校 : 大洗女子学園

学年 : 2年生 (普通Ⅱ科B組)

所属チーム : 独立狙撃部隊

担当 : 戦車長

容姿 : 艦これの【涼月】

身長 : 162cm

スリーサイズ : B || 96 / W || 56 / H || 84

現住所 : 女子寮

家族 : 父・母 (千代) ・妹 (愛里寿) ・優音

誕生日 : 4月13日 (おひつじ座)

年齢 : 16歳

血液型 : B型

好きな食べ物 : ビーフシチュー

嫌いな食べ物 : 生牡蠣

好きな教科 : 音楽と社会

嫌いな教科 : 英語

趣味 : 読書

好きな花 : ストレプトカーパス

好きな戦車 : IS-2

—備考—

本作の転生者の一人であり、主人公の一人である。所謂『大和撫子』の様な性格で、戦闘の際は西住流に匹敵する指揮能力で味方を勝利へと導く。島田家の養子であるが島田家との関係は良好。愛里寿を溺愛しているためよくシスコンと思われているし言われている。

— 主人公 2 —

名前 : 島田優音 (ゆん)

所属校 : 大洗女子学園

学年 : 2年生 (普通Ⅱ科B組)

所属チーム : 独立狙撃部隊

担当 : 砲手

容姿 : 艦これの【響】

身長 : 147cm

スリーサイズ : B || 69 / W || 49 / H || 65

現住所 : 女子寮

家族 : 父・母 (千代) ・妹 (愛里寿) ・千歳

誕生日 : 6月16日 (双子座)

年齢 : 16歳

血液型 : O型

好きな食べ物 : チーズ

嫌いな食べ物 : さつまいも

好きな教科：社会

嫌いな教科：英語

趣味・：音楽観賞

好きな花：ストレプトカーパス

好きな戦車：IS—7

—備考—

本作の転生者のもう1人の方で2人目の主人公。優しい性格でありよくふざけたり軽口をよく言っている。また試合の時はその独特のユーモアで場を和ませる。あと狙撃がつよい。(確信)

また島田家との関係は良好であり自分にとっては恩人である島田千代に対しては頭が上がない。

愛里寿の話を良くしていてシスコンとか思われてる。

—オリキャラ—

名前 : 彩月

所属校 : 大洗女子学園

学年 : 2年生 (普通Ⅱ科B組)

所属チーム : 独立狙撃部隊

担当 : 通信手兼装填手

容姿 : 艦これの【皐月】

身長 : 146 cm

現住所 : 女子寮

家族 : 父・母

誕生日 : 6月23日

年齢 : 16歳

血液型 : B型

好きな食べ物 : マカロニ

好きな教科 : 数学

嫌いな教科 : 特に無し

趣味 : 音楽鑑賞 (主にジャズ)

好きな戦車 : 74式戦車

―備考―

本作のオリジナルキャラクターの1人。千歳と優音と同じチームで、車内では通信手と装填手を担当する。とても明るい子で、コミュ力が高い。

名前 : 内海

所属校 : 大洗女子学園

学年 : 2年生(普通Ⅱ科B組)

所属チーム : 独立狙撃部隊

担当 : 操縦手

容姿 : 艦これの【時雨】

身長 : 157 cm

現住所 : 女子寮

家族 : 父・母・妹

誕生日 : 12月24日

年齢 : 16歳

血液型 : AB型

好きな食べ物 : キュウリの浅漬け

好きな教科：科学

嫌いな教科：体育

趣味・：読書

好きな戦車：T—54

—備考—

本作のオリジナルキャラクターの1人。千歳達と同じチームで、車内では操縦手を担当する。普段は面倒くさがりで全く動かないが、試合時や大事な場面では確り動いてくれるので何かと頼もしい僕っ娘。

—その他—

・役人は悪役ではない

・基本的に原作沿い

本編開始（TV編）

1 『戦車道』

— side 千歳 —

ピピピピピ

部屋の中で目覚ましのアラームが鳴る。

千歳「うーん……」

私はアラームの音で目を覚まし、アラームのスイッチを切る。そして私は布団から出て目覚まし時計の時刻を見る

千歳「……6時30分。いつも通りですね」

私はそう言い、目覚ましを机に置くと起き上がり、大きく欠伸をし洗面所に向かった。

ジャブジャブジャブ

洗面所に水をためそして溜めた水で自分の顔を洗う。

千歳「……もうすぐ始まりますね。大洗の戦車道が」

私はそう言うとタオルで自分の顔を拭く。そして冷蔵庫からパンと牛乳をとりだし、

それを食べる。

私はパンを食べながら、目の前にある写真立ての中にある写真を見る。その写真には小学生の頃の私と優音、そしてみほさんとまほさんが写っていた。

「ふふ、懐かしいですねえ。……あら、もうこんな時間ですか。そろそろ優音を呼んで登校しましょう」

私は軽い朝食を終え、学校の支度を済ませて隣の優音の部屋に向かった。

— s i d e o u t —

— s i d e 優音 —

やあ、優音だ。

黒森峰とプラウダ高校の決勝戦が終わってからまた数ヶ月経ち、私と千歳は2年に進級した。内海さんや彩月さん、麻子や沙織達も進級できた。

と言うか麻子。君千歳がおぶっていったあの日以降も普通に遅刻しそうになってた（あの日以降も千歳がおぶっていったが、結局遅刻扱いにされていた）けど、よく進級できたね。

まあそんな事は良いとして。今は私と千歳の二人で登校中だ。

優音「いよいよだね、千歳」

千歳「ええ」

そう話していると前方の方に、もう見慣れた人物がいた。

千歳「はあ……またですか」

優音「あはは。まあ麻子の低血圧は今に始まったことじゃないだろう？」

そう、麻子だ。結局低血圧は解決せず、現在も遅刻を繰り返している。そしてその麻子をおぶって行くのが今の千歳の日課でもある。

千歳「麻子さん、大丈夫ですか？」

麻子「……千歳さんに優音さんか。おはよう」

千歳「おはようございます。また寝坊ですか？」

麻子「朝、起きるのが辛い……朝なんて来なければいいのに……そうすれば一生夢を見ていられる」

優音「麻子は相変わらずだね。今日もおぶってもらったら？」

麻子「ん。千歳さん、悪いが今日も良いか？」

千歳「悪いと思っっているのなら、その低血圧を直してください」

そう言いつつ千歳は麻子を背中に乗せ、また歩き出す。私は、その千歳の隣を同じペースで歩いた。

— s i d e o u t —

— s i d e 千歳 —

無事に学校に着いた私は背中に乗せている麻子さんを下ろす。

麻子「いつも済まない。それじゃあ」

そう言い、麻子さんはいつものようにフラフラと歩いて校舎に入っていった。私達も校舎に入ろうと歩き始めると、

「ちよつと、君〜」

急に後ろから声をかけられた。私と優音は声のするほうへと顔を向けると、そこには3人の女子がいた。一人は背の高いポニーテイルな方ともう一人はドイツ軍の参謀がかけそうな方眼鏡をした方。そしてその真ん中には中学生ぐらいの身長の手し芋を食べているツインテールの少女がいた。その三人組のことを私達は知っていた。

優音「おや。誰かと思ったら、生徒会長様と副会長様。それと……誰だ？」

桃「なっ！私を忘れるな！広報の河嶋桃だ!!」

優音「あつ！モモちゃん先輩だったか。それは失礼した」

桃「モモちゃん言うな!!」

杏「まあまあ河嶋落ち着いて。」

河嶋は優音に名前を忘れられて（というよりはおちよくられて）怒るが、生徒会長で

ある角谷杏に諫められる。

千歳「で、何か御用ですか？ 私達は特に何か問題を起こしたりはしていませんが」

杏「まあ、君達に話があるんだよ」

優音「話？」

杏「うん。ここじゃあ、何だし。ちよつと生徒会室まで来てくんない？」

千歳「……分かりました」

会長達は知らないでしょうが、今から2ヶ月前に私と優音は『来年度で大洗は廃校になる』という情報をお母様から聞かされていました。お母様に『誰からその事を聞いたのですか？』と質問してみたら『文部科学省学園艦教育局長の辻廉太さんが教えてくれたの』と言う答えが帰ってきた。

いや、顔には出さなかつたですが流石に驚きましたね。まさか原作では明らかに悪役だったあの辻廉太がそんな事をするなんて。この世界の辻廉太は悪役ではないんですね。て言うかお母様と辻廉太が知り合いだった事にも若干驚きましたね。

まあそれは良いとして、

千歳&優音 「(まあ、絶対に戦車道の事でしょうね(だろうな))」

私と優音はそんな事を思いながら会長達に着いていった。

く生徒会室く

柚子 「お茶どうぞ」

千歳&優音 「ありがとうございます」

生徒会室に連れてこられた私達は副会長の小山柚子に出されたお茶を飲んで今ソファーに座っている。

千歳「それで会長。要件は何でしょうか？」

杏「ああ、そうだったね。単刀直入に言わせてもらっていいかな？」

優音「良いよ。そのほうが私達にとつても都合がいいし。何より、私は下手に遠回しにされた言葉は嫌いだからね」

杏「そうか。じゃあ言うよ。君達には戦車道を取ってもらいたいんだよ。島田千歳ちゃんに島田優音ちゃん。いや、この場合は戦車道一のスナイパー「白い死神」って呼ばばいいのかな？」

千歳「……何故その名を？」

杏「調べたのさ。で、やってもらえないかい？」

千歳「……良いでしょう」

優音「私も構わない」

杏「ありや？ 戦車道をやっていない学校にいるもんだから、てつきり拒否するかと思っただけぞ」

千歳「まあ戦車道は嫌いではありませんし、むしろやりたいですから」

優音「私もだ」

杏「おっけー。まあ話はこれだけだからもう帰つてー」

千歳「ただし」

杏「ん？何だい？」

千歳「条件として、試合中私達は独断で行動させていただきます」

桃「なっ?! 貴様、何を勝手な!」

杏「まあまあ、河嶋落ち着いて。で、なんでだい？」

優音「私達のやり方は遠距離からの狙撃だ。その為他の車輛と連携を取りながら戦うのはきつい。故に独断で行動させてもらう、と言うことだ」

杏「成る程ね、分かった。その条件飲む」

桃「良いのですか、会長!」

杏「良いも何も、こっちはお願いしてる立場なんだから、これくらいの要求は飲んであげないと示しが付かないでしょ？」

桃「は、はい……………」

杏「まあそんなわけで、これからよろしくね。千歳ちゃん、優音ちゃん」

千歳&優音「よろしくお願いします(よろしく)」

交渉を終えて私達は生徒会室から退出しようとする。が、私は会長に聞いておかなければならないことがあったので、退出する前に会長に質問をした。

千歳「会長」

杏「何だい？」

千歳「この前文部科学省の役人から『大洗を廃校にする』という通告が来ましたね？」
生徒会「「っ!?!」」

私の質問に生徒会のメンバーは驚きの表情を見せる。まあ、自分達しか知らないと思っていた情報を他人が知っていれば当然でしょうけど。

杏「何でそれを君が知っているんだい？」

千歳「それは私と優音が島田流の人間だからです。このくらいの情報は直ぐに手に入ります。そして通告が来たとき、貴女は『戦車道大会で優勝したら廃校を無しにする』という提案をしましたね？」

杏「うん。したよ？」

千歳「その際、それを証明する契約書などを書きましたか？」

杏「……いいや、してない」

千歳「分かりました。質問は以上です。失礼します」

私は生徒会室から退出し、残りの授業を終えて帰宅した。そしてその週の土曜にお母様に連絡して、後日正式な契約書を書いたのだった。

2 『再会』

—side 彩月—

やあみんな、初めましてだね！ 千歳や優音、内海と一緒に戦車道をやってる彩月だよ！ 何気に初めてだね、私が話すの！

まあ、それは良いや。それよりも、今日登校して昨日出せなかった課題を出しに教室に行ったら、見たことない子がいたんだよねえ。

課題を出したついでにその子の事を聞いてみたら、今日からA組に転校してきた子らしいね。これは3人に話しておこうかなあ。

という事で

彩月「ねえ、ねえ、聞いた？ A組に転校生が入るらしいよ」

内海 「へ〜どんな子？」

彩月 「なんか、引っ込み思案そうな子だったよ」

内海 「へ〜」

千歳 「転校生、ですか」

優音 「引っ込み思案ねえ」

そんなことを言っているとすぐそばにいる女子達もそんなことをしゃべっているのが聞こえる。それにしてもこの時期に転校生って珍しいよね。あ、因みに私と内海、千歳に優音は全員B組だよ。

すると急にスピーカーからアナウンスが聞える。その内容は全生徒は体育館に集合せよとのことだった。

| s i d e o u t |

| s i d e 内海 |

初めまして。僕は内海。

僕達は体育館で座っている。

内海 「はあ、めんどくさい」

そんなことを考えていると急に室内が暗くなりそしてスクリーンに何かが写る。その題名は

『戦車道』

そう書かれていた。そしてその戦車道の紹介アナウンスをしているのは生徒会の小山先輩だった。

柚子『戦車道、それは伝統的な文化であり、世界中で女子の嗜みとして受け継がれて来ました。礼節のある、淑やかで慎ましい、そして、凛々しい婦女子を育成する事を目指した武芸でもあります。戦車道を学ぶ事は、女子としての道を極める事でもありません……』

小山先輩の紹介アナウンスと共にスクリーンには三号戦車j型が写り、女子戦車員が乗って砲撃したり、凱旋したりしている映像が流れだす。千歳と優音は黙々と、彩月は楽しそうに映像を見ていた。そして小山先輩のスピーチもクライマックスのところまで来ていた。

柚子『さあ、皆さんも是非とも戦車道を学び、心身ともに健やかで美しい女性になりましょう。来たれ！乙女達!!』

小山先輩がスピーチを終えると、急に大きな音と白い煙が上がりいつの間にか中央に生徒会三人がいた。

そして、履修科目に戦車道を入れること、そして戦車道履修者にはこの前俺に行つていた特典のことを話した。あの会長のことだから『入ってくれたら干し芋プレゼントするよ』なんて言うのかと思つたけど、そんな事はなかつたから良かったよ。

そして放課後、僕や千歳達は帰宅する準備をした。周りの女子たちは先ほどの戦車道の話をしている。僕達は教科書などをカバンに入れると、教室から出て、そしてその階段を降り学園を出て、大洗の女子寮へと向かう。

内海&彩月「(千歳や優音は戦車道やるって言つてたし、僕(私)もやろうつと)」
僕と彩月はそんな事を考えながら、自分達の部屋に入つていった。

（三日後）

— s i d e 千歳 —

おはようございます。千歳です。現在私は優音と一緒に弁当を食べているところです。彩月さんと内海さんは学食をとるとの事で、今は不在ですが。すると、

『普通Ⅰ科A組西住みほ。至急、生徒会室まで来るように。………繰り返す。普通Ⅰ科A組西住みほ。至急、生徒会室まで来るように。以上。』

と、校内アナウンスが出ました。それは生徒会からの端的な呼び出しでした。

優音「モモちゃん先輩か」

千歳「まだそれで呼んでるのね」

恐らく、桃先輩がしびれを切らして戦車道とるか否か呼んでるのでしょうか。

千歳「私も行ってくるから、優音はここで待ってて。こういうのは私の方が向いてるから」

優音「ああ、頼んだ」

私は生徒会室に向かうため教室を後にした。

生徒会室につきノックをしようとしたら………

沙織『さつきから聞いてれば勝手な事ばかりじゃん！みほは戦車道とらないからね！』

華『そうです、西住さんのことは諦めてください!!』

と、生徒会室から沙織さんと華さんの声が聞こえる。この二人がいるなら、みほさんがここにすることは確かですね。その確信と共に、私は生徒会室の扉をノックをする

コンコンコン

桃『ん？誰だ？』

と、桃先輩の音がする

千歳「普通Ⅱ科B組の島田です。先ほど放送を聞いてやってきました」

『ああ、千歳ちゃん？入って、入って』

と、会長の声が聞こえる。そして私が入るとそこには放送の時に名を聞いていた人物がいました。

みほ「……………千歳ちゃん？」

千歳「久しぶりですね。みほさん」

そう、そこには数ヶ月前に会った幼馴染である、西住みほがいました。

みほ 「千歳ちゃん、ここに入学してたんだ」

千歳 「ええ。私以外にも優音や彩月さん、内海さんもここにいますよ」

みほ 「優音ちゃん達もいるんだ」

私とみほさんがそう話していると、

桃「それより島田。お前からも西住に戦車道に入るように何かいつてくれ」

桃先輩が急ぎ気味に言ってくる。そして桃先輩の言葉を聞き、みほさんは俯いてしまう。まあ、理由は分かっていますが。でも、会長でもみほさんを苦しめるのならたじゃおかない。

千歳「はあ……大方、みほさんが戦車道を取らなかつたから、緊急に呼んで戦車道を取るように脅したのでしょう？それでうまくいかないから私に説得させると言うことですか？」

私がそう言うのと会長は苦笑いする。凶星ですね。まあ、私と優音の事を調べたのなら、当然この大洗に引越してきたみほさんの素性も調べているはず。だから会長は私にみほさんに戦車道を取るよう説得させるつもりなのでしょう。

杏「脅すっていうのはちよつと心外だよ千歳ちゃん。私たちは彼女に戦車道を取って

ほしい。さもないと退学にするぞうって言ってるだけだよ」

千歳「それを脅すって言うのですよ？会長」

私はそう言いつつ会長を睨む。

沙織「みほ、千歳のこと知ってるの？」

みほ「うん・・・千歳ちゃんとは幼いころからの友達なの」

華「そうだったのですか」

後ろの方ではみほさんと沙織さん、華さんが話している。みほさんは彼女達と仲良くなれましたか。それならひと安心です。みほさんは昔からちよつと人見知りする子でしたからね。

私は溜息をつく

千歳「みほさんが戦車道をやらないなら、それはみほさんが選んだ道です。私が彼女に強制する権利はありません。みほさんがどんな道を選ぼうと、それは彼女の自由です」

みほ「千歳ちゃん……」

桃「なっ！ 貴様っ！ 生徒会にたてつく気か!!」

と、桃先輩は怒鳴るが、本気で怒った時のお母様に比べたら全然怖くありません。むしろチワワが吠えているみたいで可愛いぐらいです。

因みに怒られたのは私と優音が戦車道中学生大会で敵を助けた時です。いやあ、本当に怖かった。

まあ、そんな事はどうでも良いですね。私は桃先輩を無視しみほさんへ顔を向ける。

千歳「それでみほさん。貴女はどうしたいのです?」

みほ「え?」

千歳「誰の意見でもない、貴女の答えです。さつきも言った通り、これは貴女の道です。自分が後悔しないように、好きに選びなさい」

私とみほさんは互いの目をじっと見ている。すると、何か決断したようにみほさんの瞳が光る。その目は昔のように純粹で、そして強い信念のようなものを感じました。

みほ「あ、あの！」

みほさんは一歩前に出て生徒会三人の前に立ち、そして

みほ「私！戦車道…やります!!」

それがみほさんの答えだった。その言葉に沙織さんと華さんが驚く。すると生徒会三人も納得したように頷くのだった。

千歳「みほさん。それで良いのですね？」

みほ 「うん。千歳ちゃん」

千歳 「……そうですか。ならみほさん。私や優音も戦車道を選択しているので、よろしくお願いします。では会長。私はこれにて失礼します」

私は生徒会室からを出ようとしたが

杏 「ああ、千歳ちゃんちよつと待った」

千歳 「はい？」

杏 「君は少し残ってくれないかな？戦車道について頼みたいことがあるんだ」

千歳 「分かりました」

みほさん達が生徒会室を出た後、残されたのは私と生徒会の三人だけになりました。

千歳「で、会長。頼みとは？」

「ああ、それね？　君は戦車道をやってたんだから、当然こっちに戦車持ってきてるでしょ？」

千歳「はい。寮の近くにあるガレージに止めてありますが」

杏「明日から戦車道の授業始めるから、持ってきてほしいんだよ。あ、今日はもう遅いから、明日授業が始まる少し前に取ってきて。ペナルティーとかは無いから」

千歳「分かりました。頼み事は以上ですか？」

杏「うん。これだけだよ。じゃ、明日からよろしくね」

千歳 「はい。失礼しました」

そう言い、私は生徒会室を後にした。

3 『搜索』

l s i d e 優音 l

桃 「思ったより集まりませんでしたね」

柚子 「全部で22人です、私たちを入れて25人」

杏 「まあ、何とかなるでしょ、結果おーらい」

やあ、優音だよ。

今私達は戦車道受講者と一緒にグラウンドの倉庫前に居るよ。

華 「いよいよ始まりますわね」

みほ 「うん…」

彩月 「そんなくよくよしないで！ほら、笑顔笑顔！」

内海 「みほさん、元気だして」

みほ 「ありがとう彩月さん、内海さん」

武部 「さらにモテモテになったらどうしよう」

優音 「それは無いんじゃないかな？」

武部 「やってみないと分からないじゃん！」

ん？誰かこつちに来るね？

磯辺 「おーい、千歳と優音じゃないか」

優音 「おつ、磯辺じゃないか」

千歳 「こんにちは、磯辺さん」

そう言えばバレエ部も戦車道やるんだったね。

実は知り合った後、時々練習に付き合ったり、練習後にご飯を食べに行ったりしてたら仲良くなってたよ。

やったね。

みほ 「あの、この方達は？」

華 「優音さん達のお友達ですか？」

優音「そうそう、この人達はバレエ部（仮）の人達だよ」

磯辺「（仮）言うな！あつ、それと私は磯部典子つて言います、よろしくお願いします、それにその背番号が3の娘は近藤妙子、背番号6が佐々木あけび、背番号5が河西忍です」

近藤・佐々木・河西「よろしくお願いします」

みほ「私は西住みほです、よろしくお願いします」

武部「私は武部沙織、よろしくね」

五十鈴「五十鈴華と言います、よろしくお願いしますね」

磯辺「ていうか、優音達も戦車道するんだな」

優音「まあ戦車が好きだからね」

磯辺「意外だな、あんなバレー上手いのに」

まあ前世で現役でバレー部だったからね。

桃「これより、戦車道の授業を開始する」

秋山「あの！戦車はティーガーですか？それとも…」

すまない、秋山さん。

そんな立派な戦車は今のところ無いんだ。せいぜい私達のt-44-100くらいだよ。

杏「ええくと、なんだったけな？」

杏は倉庫の扉を開けた

『『うわあ〜……』』

そこには錆だらけのI V号戦車D型があった。

優季「何これ〜」

桂利奈「ボロボロ〜…」

あゆみ「ありえなくいい…」

みんな落ち込んだ顔をしてるね…

そりやあんなに錆だらけの戦車を見せられるとね…

五十鈴「わびさびでよろしいんじゃ…」

武部 「これはただの鉄錆び…」

その時、千歳とみほがI V号に近づいた

千歳とみほがI V号戦車に触りながら

千歳 「装甲も転輪も大丈夫そうですね」

みほ 「うん、これで行けるかも」

『『『おおう』』』

いいね、このシーン好きだなあ…

ていうか秋山さん本当に嬉しそうな顔をしてるね。

さて、これから戦車探しか…

l s i d e o u t l

l s i d e みほ l

武部 「どこにあるって言うのよー!!」

五十鈴 「駐車場に戦車は止まってないかと…」

こんにちは、西住みほです。

今私は武部さん、五十鈴さん、優音ちゃんに彩月さんと一緒に戦車を探しています。

何故こうなったかと言うと今ある戦車があのでⅠⅤ号しかなくて会長が

《じゃあ戦車探そつか!》

と言つて今に至つてます…

しかも手がかりは何も無いんです…

あつ、ちなみに千歳ちゃんと内海さんは自分たちの戦車の整備をしに一旦家に戻るそうなので別行動中です。

武部「だつて一応は車じゃない!」

彩月「いや、もし止まったら誰か報告してるでしょ」

優音「彩月、正論言うのは可愛そうだから止めてあげて…」

武部「じゃあ裏の山林行ってみよ！なんとかを隠すには林の中って言うしね」

あれ？誰か気の後ろに隠れてますね…

とりあえずみんなについて行きましょう

五十鈴「それは森です…」

みんな歩き始めましたけど後ろの人着いてきますね…

どうしよう…

よし！こうなったら戦車探しを手伝って貰えるように誘っちゃいましょう！

みほ「あつ、あの！」

？「はいつ!？」

みほ「良かったら、一緒に探さない？」

？「いいんですか！あつ、あの…普通2課2年3組の秋山優花里と言います、えつと…不束者ですがよろしくお願いします！」

そんな深々礼しなくても…

五十鈴「こちらこそお願いします、五十鈴華です」

武部「武部沙織！」

内海「私は小鳥遊 内海（たかなしうつみ）」

みほ・優音「私は…」

みほ・優音 「あつ、」

優音ちゃんと喋るタイミングが被っちゃいました…

秋山 「存じ上げております！西住みほ殿と島田優音殿ですよね！」

あつ、私の喋るタイミング…

みほ 「あつ、はい…」

秋山 「では行きましょう！」

—————

今私達は裏山に来てます。

本当に戦車なんてあるのかなあ…

五十鈴「？」

？どうかしたんでしょうか？

武部「どうかした？」

五十鈴「スンスン…あつちから匂いが…」

匂い!?

秋山「匂いでわかるんですか？」

彩月 「スンスン、私にはなんにも匂わないよ」

優音 「僕もだね」

五十鈴 「花の香りに混ざってほんのりと鉄と油の匂いが…」

彩月 「凄い嗅覚してるねえ」

五十鈴さんの嗅覚はどうなっているんでしょう…

武部 「華道やってるとそんな敏感になるの？」

優音 「いや、多分五十鈴さんだけだと思う…」

秋山 「では、パンツアーフオー！」

武部 「パンツのアホ!？」

あはは…最初はそう聞こえちゃうよね…

みほ「パンツアーフォー、戦車前身って意味なの」

彩月「でもいくらなんでもそんな間違えしなないと思うけどね…」

優音「きつと変態なんですよ」

武部「ち、違うよ！」

あつ、武部さんの顔が赤くなってる。

草むらを移動中…

武部 「あつ、あつたー！」

38t…

五十鈴 「この戦車はどういう戦車なんですか？」

秋山 「この戦車は38tって言って、ドイツの初期の電撃戦を支えた重要な戦車なんです！あつ、ちなみに38tのtはチェコスロバキア製って意味なんですよ！」

秋山さんすごく生き生きしてる…

戦車が本当に好きなんだろうね。

武部「今すぐく生き生きしてたよ…」

秋山「ごめんなさい…」

優音「大丈夫秋山さん、私も戦車好きだからその気持ちわかるよ」

秋山「優音殿…ありがとうございます！」

優音ちゃんナイスフォロー。

彩月「じゃあ生徒会に連絡しよ〜」

あつ、すっかり忘れてました。

優音「じゃあ私がやるよ」

みほ「お願い」

優音「任せろ」グツ！

なんか心配になるなあ…

プルルル…

桃『河嶋だ』

優音「おつ、桃ちゃんだ」

フフツ…桃ちゃんて…

武部「桃ちゃん…フフツ…」

桃『貴様！何回言ったら分かるんだ！』

優音 「まあそう怒らないでくれ、桃ちゃん先輩」

桃 『先輩を付けばいいとかという問題ではない！あと敬語を使え！』

彩月 「まあた河嶋先輩弄ってるよ…」

桃 『はあ…もういい要件を言え』

優音 「学校の裏山で38tを見つけた、結構錆びてるようだよ」

桃 『裏山だな？了解、運搬は自動車部にやらせる。そのまま引き続き搜索に当たつてくれ』

優音 「了解、桃ちゃん先輩」

桃 『はあ…もう好きにしろ…切るぞ！』

ピーツピーツ…

優音「あれっでもう好きに呼んでいいってことだよね？」

何か優音ちゃんが悪い顔してる…

彩月「好きにしろってことだからそうじゃない？」

優音「ふふふっ…」

武部「なんか怖いよゆん…」

この後私達は学校に戻り、他の搜索チームが89式、3突、M3リーを見つけたそうです。

そして翌日…

河嶋「八九式中戦車甲型、38t軽戦車、M3中戦車リ、三号突撃砲F型、IV号中戦車?型、どう振り分けますか会長?」

杏「見つけたもんが見つけた戦車に乗ればいいんじゃない?」

小山「え?そんな適当でいいんですか?」

杏「いいの、いいの。そのほうがいちいち話し合って決めるよりずっと効率いいから」

小山先輩の言う通り、そんなんでいいんですか会長…その場にいたみんなが内心そう突っ込んでいた。それはさておきその後の結果戦車とメンバーは見つけたチームのものとなり、私は武部さんと五十鈴さん、秋山さんとIV号に乗ることになりました。

杏「あ! 千歳ちゃん」

千歳 「はい。何でしょう」

杏 「君の戦車の整備はもう終わった？」

千歳 「はい」

杏 「ならここにその戦車持ってきてもらえるかな？」

千歳 「分かりました。優音、彩月さん、内海さん、行きますよ」

優音 「分かった」

彩月&内海 「はい」

千歳ちゃん達四人はそう言い、家に向かっていきました。

— s i d e o u t —

— s i d e 千歳 —

優音 「さて……やりますか」

千歳 「内海さん、準備は良いですか？」

内海 「いつでもいけるよ」

彩月 「こつちも準備できてるよ？」

千歳です。現在自宅近くのガレージでt—44—100を出す準備が終わったとこ

ろです。

優音「それじゃあ行くのか。しかし、こいつに乗るのは中学以来だな」

内海「そうだね。そういえば、この子って砲を100mmに変えてから1度も試射してないんだよね？ 大丈夫なのかい？」

彩月「まあなんとかなるんじゃない？ 撃ってない代わりに整備は入念にやって来たんだし」

千歳「そうですね。では行きましょう。早く行かないと怒られてしまいます。内海さん、エンジンをかけて下さい」

内海「了解」

内海さんはそう言うときぐさまエンジンをかける。すると、ガレージ内にT-44-100のエンジン音が響き渡った。久しぶりですね、この子のエンジン音を聞くのも。

千歳「では行きましょう。T—44—100、前進！」

私はそう叫び、T—44—100を学園へと前進させた。

—side out—

—side みほ—

桃「皆ご苦労だった。後の整備は、自動車部の部員に今晚中にやらせる。それでは、本日は解散！」

「「はーん」」

みほです。千歳ちゃん達がいなくなった後、私達は自分達の乗る戦車の洗車をしました。そして現在洗車作業が終わり、解散となりましたところですよ。

沙織 「早くシャワー浴びたい」

優花里 「はやく乗りたいですねえ」

みほ 「あつ、う、うん」

優花里 「？」

秋山さんが私にそう言うが、私は曖昧な返答しかできなかつた。すると、

ガガガガガガッ!!!

「どこからか戦車の走行音が聞こえてきた。

杏「おっ！ 来たね」

会長が嬉しそうにそう言う。すると、1台の戦車がこつちに向かってきた。

みほ「あの戦車は……」

優花里「T-44です！それも100mm砲搭載型ですよ！　こんな貴重な戦車を見れるなんて感動です！」

私の隣で秋山さんが目を輝かせながらそう言う。

T-44……そうか、あの戦車は千歳ちゃん達のか。中学の時に見た時より見た目が少し変わってるなあ。

そうしているとT-44-100はあつという間に私達のすぐ目の前まで近づきそ

の場で停止する。そしてそのキューポラから千歳ちゃんが顔を出した。

千歳 「会長、この子どもに置けば良いんですか？」

杏 「ああ、あそこに置いといて」

会長は干し芋を食べながら、私達の戦車が置いてある車庫を指差す。

千歳 「わかりました。では失礼s 「あ、あの！」、はい？」

千歳ちゃんの言葉を遮り、秋山さんが声をあげる。

優花里 「もしかして千歳殿達は、あの『白い死神』なのですか？」

千歳 「ええ、まあ……それがどうかしたのですか？」

千歳ちゃんは苦笑いしながらそう答える。

優花里「もし良ければ、後でお話を聞かせてもらえないでしょうか？」

千歳「ええ、構いませんよ。では、失礼致します」

千歳ちゃんは会長へそう言い、T-44を車庫に移動させていった。

その後千歳ちゃんと優音ちゃん、沙織さんに五十鈴さん、秋山さんを家に上げて、みんなでご飯を食べたりしました。戦車道をする事になって、まだ少し不安ですが、これ

から頑張っ
ていこうと
思います！

4 『初戦闘（1）』

—side 優音—

あれから午後、戦車道の本格的な授業が始まる。そして戦車道履修者は全員戦車格納庫に集まっていた。

千歳「みほさん、遅かったので心配しましたよ」

みほ「ごめんね。ちょっと寝過ぎしちゃってね」

武部「教官も遅ーい。焦らすなんて大人のテクニクだよねー」

と、いらいらしながらそう言う武部。武部、あんまり期待しないほうがいいよ……

そう思っているとすごい轟音とともに上空から空自のC2改が飛んできた。あれだな、教官が乗ってるのは。するとC2改の後部ハッチが開きそこから陸自の最新鋭戦車10式戦車がパラシュート降下してきた。そして10式は無事に着地成功。しかし駐車場でスライディング着陸したため、赤い車に激突した。もちろん40トン以上の巨体に耐えられるはずもなく赤い車はひっくり返る

小山「学園長の車がつ！」

杏「あゝやつちやたねゝ」

そんな小山先輩の悲鳴が聞こえてきた。あれって学園長の車か・・・しかも学園長の車はこのままでは済まなかった。10式がバック走行で踏みつけぺしやんこにした。

千歳「あつ、あゝ」

河嶋「ポテチ・・・」

河嶋さんの言う通り、学園長の車はポテチのごとく真つ二つにぺしやんこになった。あの車、保険入っているといいんだけど。けど戦車に踏みつぶされたって言つて保険と降りるかは不明だ。

優音「派手にやったね……千歳、あの戦車の車長つて……」

千歳「ええ……あれは間違いないですね」

すると戦車は車を踏み潰したことを気にもせずはこちらに向かい停車した。そしてキュウーポラから人が出てきた。

蝶野「こんにちわ！」

挨拶をしたその人物は確かにかっこいい顔をした女性だった。やっぱり蝶野さんか……それを見た武部は……

武部「……騙された」

五十鈴「でも素敵そうな方ですね」

と落胆していた。甘いよ武部、聞けば角谷さんはかつこいい人とは言ったが男性とは言っていない。つまり武部が勝手に勘違いしただけだ。それと五十鈴、ナイスフォロー。

河嶋「特別講師の戦車教導隊、蝶野 亜美一尉だ」

蝶野「よろしくね！、戦車道は初めての人が多いと聞いていますが一緒に頑張りましょう！」

そう言い皆を見る蝶野さん。すると私と千歳とみほに気付く。

蝶野「あら？西住師範のお嬢様に島田師範のお嬢様方じゃありませんか!？」

そう言うと、蝶野さんはこちらのほうに近づく

蝶野 「師範方にはお世話になっているんです！ お姉様や愛里寿ちゃんも元気？」

みほ 「は、はい……」

千歳 「ええ。愛里寿もお母様も元気ですよ」

千歳はそう返事をするがみほは少し落ち込んで言う。

蝶野さんが私達島田流と関わることはあまりないけど、たまに家に挨拶に来てくれたりしていたから、私達は顔見知りなんだ。

「西住師範って？」

「島田師範って？」

「有名なの？」

とあたりがそう話すと

蝶野「西住流や島田流ってというのはね、戦車道の中でももつとも由緒のある流派なの！」

と、蝶野さんがそう説明してくれる。すると武部が手を挙げて

武部「教官！ 教官はやつぱりモテるんですか!？」

そう言う。おそらく周りの話声でみほが暗い顔になったのを見て話題を変えてくれたんだろう。すると蝶野さんはうぐんと首をひねり

蝶野「モテる、というより…、狙った獲物を外した事はないわ、撃破率は120%!!」

蝶野さんそれ答えになってませんよ。というより撃破率って何？狙撃でもするつもりなのか？

秋山「それで教官！今日はどのような訓練を行うのですか？」

と秋山が質問する。普通の教官なら操縦とかの基礎とか教えるんだけど蝶野さんの場合じゃ多分…あれだな

蝶野「本日は本格戦闘の練習試合、さつそくやつてみましょう」

やつぱり……

小山「え？い、いきなり実戦ですか？」

小山先輩が驚いてそう言う。まあ当然だろう

蝶野「何事も実戦あるのみよ、大丈夫、戦車なんてバーツと動かしてダーツと操作してダンツと撃てばいいんだから」

みんな不安そうな顔をする。蝶野さんって、言葉で教えるタイプじゃなくて体で覚え

させるタイプの人だからな。私達も初めてあの人の訓練を見た時は動揺したよ。

蝶野「それじゃあ、それぞれのスタート地点に向かつてね」

蝶野さんに指示で皆戦車に向かう。さて、やりますか、そう思い私はT—44—100に乗り込んだ。が、一方他では・・・

「どうやって乗るのこれ〜？」

「知ってそうな友達に訊いてみようか？」

「ネットで聞いたほうが早くない？」

戦車なんて触ったことも見いたこともない1年生たちがどう動かせばいいか悩んでいて一人がネットで調べていた。

磯辺「ここで頑張れば、バレー部は復活する！あの廃部を告知された屈辱を忘れる

なっ！」

「「はい。キャプテン！」」

「ファイター!!」

「「「おおー!!」」」

八九式のチームは一致団結して士気が高かった。一方三突では

「初陣だあー！」

「車簿の陣で・・・」

「いや、ここはパンツァーカイルで」

「一両しかないじゃん」

「とまあ、こんな感じで練習試合が始まる。」

千歳「じゃあ、内海さん。エンジンを始動させて下さい」

内海「了解」

「そう言い内海はエンジンを始動させる。」

彩月「久しぶりに暴れられて喜んでるよ、この子」

優音「そうだね」

私がそう言うとき……

秋山『やつほおー！最高だぜー！！』

優音 「ん？」

千歳 「どうしたんですか？ 優音」

優音 「いや、なんか秋山の声が聞こえたような気が」

千歳 「はい？」

優音 「いや、なんでもない」

気のせいだよな。あの秋山があんな声出すわけない……たぶん。

蝶野 『それでは、全戦車パンツァーフォー！』

と、蝶野さんの号令が始まる。

千歳 「それでは、指定ポイントまで移動しましょうか。内海さん、前進してください

！
」

内海 「わかった。」

そして、私達の乗るT-44-100（以降T-44）は動き出し、指定ポイントへと向かうのであった。

— s i d e o u t —

5 『初戦闘（2）』

—side 千歳—

千歳達が乗っているT-44は今、スタート地点に行くため学校の裏にある森を走っている。

優音 「最初に私達はどう動く？」

千歳 「最初は遠くから様子見しましょう」

彩月 「凸らないの？」

内海 「僕たちの戦車は周りと比べて強いからつまらないでしょ…？」

千歳 「その通りです」

私達の乗るT-44は基本的に正面装甲は今の大洗の戦車じゃ抜けませんからね。ワンサイドゲームになっちゃいそうでつまらないからこの選択をしました。

彩月「ところでみんなどこら辺に来るか分かってるの？」

千歳は森のマップを皆に見えるように広げた。

千歳「今回は皆さん初心者なので複雑な動きはせず基本真っ直ぐに進んでくると思います。その皆さんが交わる場所がこの吊り橋のところなんです。ここが見えるところで様子見しようと思っっています」

本当はどこに来るか知ってるんですけどね。

内海「なんでマップなんか持ってるの…？」

千歳「一応です、一応」

優音「まあ相手にみほがいるからいい選択だと思うよ」

彩月「でもいらなと思うけどなあ」

だってあのみほさんですよ？何があるかわからないじゃないですか。

千歳「あつ、内海さん停車してください」

ゴンツ！

彩月「いつつ…もう！急に停車するのはやめてよ！」

内海「油断してるそつちが悪い気が」

優音「まあまあそろそろ蝶野さんから通信が入るから」

ピーツ：

蝶野 『みんな、スタート地点に着いたようね！

ルールは簡単、全ての車両を動けなくするだけ！

つまり、ガンガン前進してガンガン撃ってやっつければいいわけ！分かった？』

蝶野 『戦車道は礼に始まって礼に終わるの、一同！礼！』

みんな 「」「よろしくお願いします」「」

蝶野 『それでは、試合開始！』

l s i d e o u t l

l s i d e みほ

こんにちは。

いま私たちは戦車道の演習をしています。

役職は武部さんの案でくじ引きで決めたら、車長が武部さん、装填手が私、操縦手が五十鈴さん、砲手が秋山さんになりました。

蝶野『それでは、試合開始！』

優花里「いよいよですねぇ〜！」

五十鈴「秋山さんはりきってますね」

みほ 「武部さん、どうします?」

沙織 「じゃあ生徒会潰さない? あの人たち教官男の人とか言っただけで嘘ついたからさ!」

「「まだ根に持ってたんだ・・・」」

五十鈴 「じゃあ生徒会のところ・・・」

ドオオオオオオン!!

砲撃!?

優花里 「うわあああ!」

沙織 「なに!? 何が起こったの!?!」

みほは砲塔横のキューポラから身を乗り出し周りを見渡した。

さつきの砲撃は89式の？

沙織「怖い！逃げよお〜！」

わあ！目の前に着弾しました。危なかつたです・・・

五十鈴「沙織さん！前から別の戦車がきます！」

沙織「えつと・・・あつちに逃げて！」

五十鈴「聞こえませんか！」

沙織は五十鈴の左肩を蹴りながら

沙織「右斜め前!!」

後ろから追いかけてくるⅢ突と89式から逃げているとみほは進行方向の切り株に女子生徒がいるのが見えた。

みほ「危ない!!」

その女子生徒は戦車に飛び乗ろうとしたが跳躍が足りなくてこけてしまった。

??? 「にぎやふ！」

みほ「大丈夫ですか？」

??? 「むうく・・・」

その女子生徒は頬を膨らまし不満を表わしているつもりだろうが微笑ましいだけである。

みほ「あつ！今朝の！」

みほがそう口にした後、キューポラが開き沙織が顔を出した。

沙織「あれ？麻子じゃん」

沙織が言い終えた瞬間、砲弾が手前に着弾した。

みほ「危ないのでとりあえず中に入ってください！」

みほ達は中に避難した後、優花里の上で寝ている女子生徒、冷泉麻子について話しながら逃げていた。

みほ「停車してください！」

みほは戦車から飛び降り、つり橋のほうへ走っていった。

優花里「今外に出たら危ないです！」

みほ 「二発目までは時間があるから大丈夫！」

みほは戦車の前に出たら

みほ 「ゆつくり前へ！」

IV号はゆつくり前に進んだが少しずつ左寄っていきつり橋が大きく傾いた。

五十鈴 「落ちる〜！」

沙織 「嫌だー！」

その時、凄まじい破裂音と共に後方から強い衝撃が襲った。



l s i d e 優音 l

彩月「あちやくありや獲られたかな」

千歳一行は例のつり橋が見える位置からみほの一連の流れを見ていた。

4人の女子高生が戦車に乗りながら双眼鏡を覗いている光景に誰も言わないのはもう手遅れなのだろう。

優音「いや・・・動いたね」

内海「何か急に操縦が上手くなったけど・・・」

勿論操縦手が麻子になったからなのだが千歳と優音は後で追及されても面倒なので敢えて口に出さないようにした。

千歳「砲塔が回り始めましたね」

彩月「お！砲撃した！」

Aチームの砲弾はⅢ突の車体正面右に着弾し、Ⅲ突から白旗があがった。

蝶野『Cチーム行動不能！』

優音「これはわからなくなってきたね」

内海「面白くなってきたね」

そうこう話してうちに89式も撃破された。非常に不憫である。

蝶野『Bチーム走行不能！』

彩月「そろそろ準備しといた方がいいんじゃない？」

千歳「そうですね。皆さん、搭乗してください」

4人はそれぞれの位置につき戦車を始動させた。

蝶野『D、Eチーム行動不能！』

内海「優音、この辺でいい？」

優音「俯角が足りないかな」

彩月「ホントソ連戦車って俯角取れないよね」

優音「そこがいいんじゃないか！砲塔が小さくて砲尾がかつんかつん当たるのがかわいいと思わないかい!？」

彩月「あー！もうわかったから狙うのに集中して！」

優音は愛が足りないね。と言って照準器に目を当てた。

優音「内海、目の前の崖から一瞬車体を落としてくれるかい？」

内海「ちよつと成功するかわからないけど・・・いい？」

優音は内海の目を見ながら

優音「どこのフランス生まれの特殊部隊の人はチームメートを信じているって言うてたんだ。だから私も内海を信じてる」

内海「そのフランスの人が誰かわからないけど・・・分かった、やってみる」

内海は決意した顔をしながら頷いた。

千歳「ちよつと!?!勝手に決めないでください!?!」

彩月「面白そうだからいいんじゃない？」

千歳「彩月さん!？」

たった1人の抗議は意味をなさず戦車は崖の方へ前進し始めた。

内海「じゃあ…行くよ？」

優音「ばつちこい」

彩月「行つちやえ！」

千歳「いや!?!ダメですからね!?!ちよつと!?!」

戦車が崖に少し車体を出したら大きく戦車が傾いた。

千歳 「きやああああ!!」

彩月 「これ大丈夫!？」

内海 「任せたよ」

優音 「Д а в а й т е я」

優音は照準器の十字線とI V号戦車が合わさった瞬間に指が添えてある引き金を、引いた。

凄まじい音と反動が千歳たちを襲った。

その砲撃の反動で戦車は崖の上に戻った。

そして一瞬の静寂の後…

蝶野 『Aチーム行動不能！よって、Fチームの勝利！』

試合は終了した

6 『休息』

—side千歳—

蝶野「みんな初めてでこれだけガンガン動かせれば上出来よ!!」

何とか日が沈む前に格納庫につき、私達は格納庫前にいる蝶野さんの話を聞いていた。

蝶野「特にAチームとFチーム、両チーム共に素晴らしい戦いをしていたわね」

蝶野さんがそう言う。それを聞いた内海さんと彩月さん、Aチームの皆さんは嬉しそうな顔をする。そして蝶野さんは皆さんに顔を向けて

蝶野「皆あとは各々戦車訓練に励むように。何かあったら連絡ちょうだいね。それで

は、本日の戦車訓練を終了します、一同、礼!!」

「ありがとうございました!!」

一同例をして戦車道の授業は終わったのであった。

優音「ふう、なんとか終わったね。これからどうするんだい?」

内海「汗かいたし、お風呂にでも行かない?」

彩月「お、それ賛成ー!」

と、各自自由行動をしていた。すると

みほ「千歳ちゃん」

と、みほさんが来た

千歳 「みほさん、お疲れ様です」

みほ 「うん……それにしても驚いちゃった。高台から落ちる間に砲撃するなんて」

千歳 「あれは優音が……」

みほ 「優音ちゃん？千歳ちゃんがやるように言っただんじやないの？」

千歳 「はい……はあ、お陰で寿命が少し縮まりましたよ」

みほ 「あははは……」

千歳 「そう言えば、何故冷泉さんがIV号に乗ってたんですか？」

まあ、原作見てましたから、理由は知ってるんですけど。

みほ「うん。実は模擬戦の最中に切り株のところまで寝てたところを見つけてね、で、巻き込まれそうになったのをIV号に乗せたの」

千歳「そうだったんですか」

みほ「それにしても千歳ちゃん。今回は引き分けだったけど次は負けないからね」

千歳「ええ、いつでも受けてたちますよ」

みほ「うん♪ あ、千歳ちゃん。今からみんなとお風呂に行くんだけど、千歳ちゃん達も一緒に行こうよ」

千歳「そうですね。優音、内海さん、彩月さん、お風呂行きましょーう？」

「「はーい」」

その後、私達は汗を流しにAチームの皆さんとお風呂に入りに行ったのだった。

千歳「はあく………疲れました………」

お風呂から上がって家に戻った後、私はベットに倒れこみそう言う。本当に今日は疲れました。久しぶりに戦車で神経集中させすぎたのが原因でしょう。

プルルルル〜♪

しばらく寝っ転がっていると、突然携帯電話が鳴った。

千歳「誰でしょう?」

携帯を手つてみると相手はお母様だった。

千歳 「はい、千歳です」

千代 『千歳？ そっちは大丈夫？』

千歳 「お母様……はい、私も優音も元気ですよ。それで、なにか御用ですか？」

千代 『戦車道始まったんでしょ？ あの子の調子はどうだった？』

千歳 「ええ、何も問題はありません。しかし流石お母様です。情報が速いですね」

千代 『当然よ。大洗の情報は、辻さんを通して全てこちらに伝わってるからね』

因みに私と優音が高校を選ぶ際、多数の戦車道の強豪校からオフアアが来ていたのですが、その時も辻さんに手伝ってもらったことがあるんです。

また、辻さんはお母様の部下だったりします。今は戦車道連盟の会長の部下だそうですが。

千歳 「流石辻さんですね。頭が上がりませんよ」

杏 『そうね。上司として鼻が高……あら、どうしたの愛里寿？ ああ、お姉ちゃんよ。分かったわ。千歳、今愛里寿と変わるわね』

そう言い、お母様は電話を愛里寿に渡す。

愛里寿 『千歳お姉ちゃん、久しぶり』

千歳 「あら愛里寿、久しぶりね。大学は楽しい？」

愛里寿 『うん、楽しい。ねえお姉ちゃん、次はいつ帰って来るの？』

千歳 「そうねえ。とりあえず、今年の戦車道大会が終わったらかしら」

愛里寿『わかった。楽しみにしてる。優音お姉ちゃんにもよろしく』

千歳「ええ、優音にも言っておくわ」

愛里寿『お願い。じゃあお母さん変わるね』

そう言い、愛里寿はお母様に携帯を渡した。

千代『じゃあ千歳、私はまだ仕事が残ってるからそろそろ切るわね。優音にもよろしく』

千歳「はい、それではまた」

そう言い、私は電話を切ったけど

千歳「はあく明日もいろいろ大変ですね・・・さて、優音を呼んで、夕飯でもいい

「ただきましよう」

私はそう言い、隣の部屋にいる優音を呼びに行くのだった。

そして翌日の放課後、聖グロリアーナ女学院との練習試合の決定が告げられた。

7 『練習試合』

—side 聖グロ—

ダージリン「そうですか………わかりました。はい。では、その場所で日曜の10時に………」

大洗の初の戦車道が終わった翌日の午前、聖グロリアーナに大洗からの練習試合の申し込みが来ていた。そしてダージリンは場所のメモを取りながらそう言い、受話器を置いた。

アッサム「ダージリン。どなたから？」

と黒い大きなリボンを付けた女性、アッサムがそう言う

ダージリン「大洗女子学園からですわ。戦車道を再開したので、その練習試合をしてほしいと」

オレンジペコ「練習試合、ですか？」

と、今度は小柄でダージリンに似た髪型をした少女、オレンジペコ（以降ペコ）が訊くとダージリンはにっこりと笑い

ダージリン「ええ。そうですわよオレンジペコ。それに、面白い情報を聞きましたわ」

アッサム「情報？ 大洗に誰かいるの」

ダージリン「ええ、アッサム。大洗には千歳さんと優音さんがいるそうよ」

その言葉を聞いてアッサムは目を丸くし額には小さな汗が出ていた

アツサム「……………あの島田流のお二人ですか？」

ダージリン「ええ」

アツサム「……………なるほど。それならダージリンが楽しみにしているのも頷けるわね……………」

と、ダージリンとアツサムはそう納得しあっていたのだが

ペコ「あ、あの……………ダージリン様？アツサム様？私はよく知らないのですが。その千歳さんと優音さんって有名な方なんですか？」

と、ペコがそう訊くと

ダージリン「ペコ。ホワイトグリムリーパーのことは知っていますわよね？」

ペコ「え?……………ああ【白い死神】のことですか?はい。戦車道界最強の戦車乗りと噂されている方ですよ?遙か後方から相手の戦車を狙撃したり、予測不能な奇襲をしてきたり。また、狙った敵は必ず仕留める事から【シモ・ハイへの再来】と呼ばれた……………」

ダージリン「あら?そんな二つ名ありましたっけ?」

ペコ「はい。確かに【白い死神】の名が有名でしたが、私がいた学校ではそう呼ばれていました。」

ダージリン「そうなの……………」

ペコ「はい。それでその【白い死神】と先程のお二人に何の関係が……………まさか」

と、ペコがそう言いうと自分でも気づいたのかダージリンの顔を見る

ダージリン「ええ、そうよペコ。その二人が白い死神なのよ」

ペコ「やはりそうだったのですか………」

と、ペコが納得している中、ダーズリンは窓の外を見て微笑みながら紅茶を飲むのだった。

—side out—

—side 優音—

河嶋「今日の訓練ご苦労だった」

『お疲れさまでした!!』

やあ、優音だ。

戦車道の練習も終わり空も茜色の中私達は生徒会三人組の前に立ち練習の終わりの挨拶をした。それにしても私のチームとみほ以外のみんなは初めての練習のためか疲れた顔をしているね。まあやり初めてすぐだし、仕方ないのかもだけど。すると

河嶋「え、急ではあるが、今度の日曜日に練習試合を行う事になった、相手は聖グロリアーナ女学院!!」

桃ちゃん先輩の言葉にみんな騒ぎ出す。すると秋山は何やら難しい顔をしていた。まあ、優花里は戦車はおろか戦車道も好きだから相手の実力のことを知っているのだから。

沙織「どうしたの？」

優花里「聖グロリアーナ女学院は全国大会で準優勝したことがある強豪です……」

沙織「準優勝!?!」

と、沙織たちは驚いていた。まあ、初めて戦う相手が大会の準優勝校ならそりやあ驚くよね……………

河嶋「場所は近日寄る港……………大洗町で日曜日の10時に試合開始のため朝六時に学校に集合！」

場所は大洗町に決まったのか(知ってるけど)。それにしても朝6時か……………まあ、私達は腕を磨くために朝5時に集合してたから全く苦にはならない……………だが、桃ちゃん先輩の言葉に絶望する人がいた。それは

麻子「……………やめる」

華「はい？」

麻子「やっぱり戦車道やめる」

華「もうですか!？」

麻子「麻子は朝が弱いんだよ……」

そう、麻子だ。麻子は私と同じで朝に弱い。流石に私は麻子ほど弱くはないけど……。朝の弱い人間にとって今の言葉は死刑宣告と同じだ。すると冷泉は夕日に向かい帰ろうとしていくそれを見たまほたちが追いかける。

みほ「ま、待ってください!」

麻子「六時は無理だ!」

優花里「モーニングコールさせていただけます!」

華「家までお迎えに行かせてもらいますから」

麻子「朝だぞ? 人間が朝の6時に……起きれるか!？」

と、麻子が真剣な顔でそう言う。だが

優花里「いえ、六時集合ですから起きるのは五時ぐらいじゃないと……」

優花里、それは今言わなくていいだろ？

優花里のその言葉に麻子は倒れそうになるがすぐさま体制を立てて

麻子「人には出来ることと出来ないことがある！ 短い間だったが世話になった！」

そう言い麻子は立ち去ろうとした。だが

千歳「麻子さん……あなたはそれでいいのですか？」

麻子「なに？」

千歳の言葉に麻子が振り返る。

千歳「私は貴女の決めたことにどうこう言う気はありませんが、貴女はそれで後悔しませんか？みほたちに借りを…恩を返すために入ったのですよね？貴女はみほからの恩を仇で返すつもりですか？」

麻子「うっ……」

その言葉に麻子の足が止まる。その顔は親に怒られた子供のソレだった。律儀な人間にとつて約束を破るといふのは耐えがたくそして後悔の残ることだ。

沙織「千歳の言う通りだよ！それに麻子がいなくなったら誰が運転するのよ！それにいいの？単位!!」

沙織の言葉に麻子はさらに顔を強張る。

沙織「このままじゃ進級できないよ!! 私たちのこと先輩って呼ぶようになったから！私のこと沙織先輩って言ってみ!!」

麻子「……………さ、さ・お・り……………せん……………」

と苦しそうに言う麻子。それを見て沙織は深くため息をつき、トドメの一撃を与える。

沙織「それにさ、ちゃんと卒業しないとおばあちゃん物凄く怒るよ?」

麻子「おばあ!?!」

とその言葉で麻子の強張った顔は完全に崩れ去り、恐怖する顔に変わった。

麻子「……………わかった……………やる」

冷泉はしびしび了承するのだった。

千歳「安心して下さい麻子さん。試合の日には沙織さんたちと一緒に私達も起こ

しに行くから」

麻子「……………す、すまない……………千歳さん」

こうして麻子の戦車道脱退は防げたのだった。

……………ん？

優音・内海・彩月（（あれ、なんかとぼちり受けた？）（））

千歳の何気ない一言で、私達三人まで朝5時に起きるはめになったのだった。

— s i d e o u t —

— s i d e 千歳 —

どうも、千歳です。

練習が終わった後、私やみほ、それにほかの戦車長は会長たちに急遽生徒会室に集まるように言われた。その理由は今週末に行われる練習試合に向けて対策会議をするというのが理由だった。

河嶋「いいか、相手の聖グロリアーナ女学院は強固な装甲と連携力を活かした浸透強襲戦術を得意としている」

河島さんがボードに張られた聖グロリアーナの主力戦車のマチルダ。そしてチャール歩兵戦車のスペックや聖グロリアーナの戦法を説明していた。その話を聞いてい

たのは車長である私と、みほ、それにM3の車長の澤ちゃんに三突のカエサルさん。彼女は車長じゃないのですが歴女たちの中ではリーダー格なのでここにいる。また名前の突込みについては既に諦めてます。そして八九式の磯部さん通称「キャプテン」でした。

河嶋「とにかく相手の戦車は堅い、主力のマチルダⅡに対して我々の方は100メートル以内でないと通用しないと思え」

まあ、河島先輩の言っていることは間違いではない。マチルダの最大装甲は75mm以上。三突かうちのT-44-100じゃないと遠距離からの攻撃は難しい。しかも丸みを帯びた装甲だから弾きやすいです。その間に河嶋先輩は話を続ける。

河嶋「そこで一両が囿になってこちらの有利となるキルゾーンに敵を引きずり込み、高低差を利用して残りがこれを叩く！」

その言葉にみんなは頷いたり、勝利を確信した顔になる。悪くはない作戦です。悪くはないのですが、ここで一つ問題があります。みほもそれがわかっているのか不安そ

うな顔をしていた。

杏「西住ちゃん。千歳ちゃんどうかした〜?」

と、角谷さんは私とみほに気付いたのかそう訊く。みほは遠慮して言うが

杏「いいから言ってみ〜」

と、優しく促す。するとみほは静かにこう言った

みほ「……………聖グロリアーナは当然こちらが囹を仕掛けてくることは想定すると思います。裏をかかれ逆包围される可能性があるのです……………」

「あく確かに!」

と、みほの言葉にみんなが納得する。すると

河嶋 「うるさい！私の作戦に口を挟むな！そんなに言うならお前が隊長をやれ！」

みほ 「・・・すみません」

と、みほに怒鳴った。あれ、まほさんがいたら河嶋先輩確実に後でしごかれますね。

千歳 「いいえ、みほが謝る必要はありませんよ」

河嶋 「なんだと！島田！きさま西住の肩を持つ気か！」

と、河嶋先輩は今度は私に怒鳴る。前から思っていましたけど、河嶋先輩はクールビューティーな見た目と違い意外と短気なんですわね……………

杏 「まあ、まあ、河嶋落ち着きなよ。……………で千歳ちゃんはどお思ってるの？この作戦じゃあ不満？」

と、角谷さんが河嶋先輩をなだめて、私にそう訊く

千歳「いいえ。言葉は悪いですが、河嶋先輩の作戦自体は悪くはありません…素人にしては」

河嶋「何だと!？」

千歳「とにかく最初の作戦はそれで問題ないでしょう。ただ相手は準優勝の経験のある強豪。それに今年の聖グロリアーナの隊長はあのダージンさんです。その作戦だけでは勝てないと考えた方が良いでしょう。なので、2つか3つほど予備の作戦を立てる必要があります」

杏「なるほどね〜でも隊長は経験豊富な西住ちゃんがやるといいよ。」

みほ「え？」

まあ、予想はしてましたが会長の言葉にみほが驚く

「西住ちゃんがうちのチームを引っ張てね。それと千歳ちゃん」

千歳 「なんでしよう?」

杏 「副隊長は千歳ちゃんがやってくれないかな。本当は河嶋にやつてもらってもいいけど、やっぱり西住ちゃんも、千歳ちゃんが副隊長の方が安心できるだろうから」

と、干し芋を食べながらそう言う。副隊長ですか……………経験はありませんが、任された以上出来ることはしよう……………

杏 「……………ということでもよろしくね二人とも」

とそう言うのと笑顔で手をたたく。するとほかの子たちもにつこりと笑って手をたたく。

杏 「頑張ってよー、勝ったら素晴らしい商品をあげるから」

柚子「え？何ですか？」

杏「干し芋三日分!!」

と3本の指を突き出し、嬉しそうに言う。それを聞いてみんな呆れた顔をする。干し芋三日分って………本当に干し芋が好きなんですね、会長………

典子「あ、あの………もし負けたら？」

と、典子さんがそう言う………

杏「うーん。大納涼祭りでアンコウ踊りをやってもらおうかな」

会長のその言葉にみんな固まってしまい中には顔を青ざめていた。みほは転校したばかりなのでアンコウ踊りがどんなのかわからず首をかしげていた。私は抗議しようと思いましたがあの会長はいったん言い出したことは引かない頑固な性格ですからア

ンコウ踊り撤回は不可能でしょう。

杏「じゃあ、河嶋の作戦が失敗した時のための作戦。西住ちゃんと千歳ちゃんそのところよろしくね」

つというこで作戦会議はこれにてお開きとなった。

く試合当日く

私は朝の4時半に目が覚めた。まあ、寝た時間が早かったからそうなんですけど。

私はベッドから降りてコーヒーを飲む。コーヒーを飲み終えたら、制服に着替えて寮を出る。

千歳「優音は……内海さんに任せましょう」

私はそう眩き、ある場所へと向かったのだった。

千歳「ここですか……………」

彩月「だねえ……………」

彩月さんと合流しつついた先は、赤い壁が特徴の家だった。この家、麻子さんが住んでいる家なんです。あと10分で起床時間だが、この時間ならもう起きている頃かな？俺はそう思い、インターホンを鳴らすけど返事どころか足音すら聞こえない……………もしかしてまだ寝てるんですかね？そう思っていると

沙織 「あ、千歳達も来てたんだ」

と、沙織さんが走りながら私達のところにやってくる

千歳 「ええ、昨日約束しましたから」

沙織 「そう、千歳って律儀なんだね。・・・で、麻子起きてる？」

彩月 「いや、インターホン鳴らしたけど全然。あれは完全に寝てるよ」

沙織 「はあくやっぱりか……………」

と、沙織さんが肩を落としてそう言う。

沙織 「とにかく中に入らないと……………」

彩月 「中につて鍵かかかってるよ？どうやって入るつもり？」

沙織「こういう時のこともあって麻子から合鍵渡されているの」

彩月「あくなるほど」

彩月さんが納得して、沙織さんはポケットから合鍵を取り出し、鍵を開ける。

沙織「さ、入って。たぶん麻子なら寝室にいますと思うから」

私達と沙織さんは麻子さんの家に入る。沙織さんを先頭についていき部屋に入ると、その部屋には布団にくるまった麻子さんの姿があった。沙織さんは麻子さんの姿を見るとすぐさま布団を引っぱがして起こそうとする

沙織「も〜！麻子起きてよ〜！試合なんだから!!」

麻子「ねむい…」

沙織 「単位はいいの!？」

麻子 「よくない……」

沙織 「だったら起きてよー!」

麻子 「不可能なものは無理……」

沙織さんが思いつきり布団を引つ張ても麻子さんを包んだ布団はびくともせず麻子さんは眠そうに言う。というか、あれほど力強く引つ張ても剥がせないって麻子さんって結構力持ちなのでしょうか。それとも単に沙織さんの力が弱いのか。

……仕方ありませんね……

千歳 「麻子さん……起床時間ですよ。起きて下さい」

麻子 「………ん？」

私がそう言うのと麻子さんは布団から顔を出し眠たそうに目をこする……そして私と目が合った。

千歳 「おはようございます、麻子さん」

私がそう言うのと麻子さんは私の顔を見て突然目を大きく見開いて

麻子 「うわあっ!？」

千歳 「きやあ!？」

至近距離からの声に思わず私までびっくりしてお尻をついてしまいました。でも座布団の上でしたので痛くありません。

あ、なかなか座り心地良いですねこの座布団♪

麻子「な、なんで千歳さんがここに!？」

千歳「昨日約束したじゃないですか。起こしに行くって」

麻子「そ、そう言えばそうだったな……で、で………も確かに起こしに行くのは知ってたからわかったけど、顔が近かったから驚いたぞ」

と、ゼーはーと息をつき胸を押さえながらそう言う。

千歳「すみません。驚かせてしまつて」

私は頭を下げながらそう言う

麻子「謝らなくていい。その代わりこのまま寝させてくれ」

千歳 「☆駄☆目☆で☆す☆」

麻子 「……千歳さんのけち」

沙織 「千歳の言う通りだよ麻子。今日は試合なんだから」

麻子 「む〜」

と、麻子さんがうなる。そんな顔をしてても駄目ですよ麻子さん、かわいいだけですよ。

~~~~~♪

すると突然ラツパの音が鳴り響く。なんだろうと彩月さんと沙織さんが窓を開けて

みるとそこには優花里さんがラッパを吹いていた。外も日が上がって明るくなっていた。

優花里「おはようございます………て、あれ？千歳殿？」

千歳「おはようございます優花里さん。朝早くからお疲れ様です」

私がそう言うのと履帯音が聞こえてくる。何かと思いそとを見渡すとIV号戦車が現れた。

千歳「IV号？ということとはみほですか？」

沙織「うん、私が携帯で呼んだんだ。たぶんてこずると思ってたから」

なるほど……それは分かりましたが、戦車で一体何をする気なんでしょう？私がそう思った矢先、IV号の短砲身が上を向く。

そして

ドオオオオオンツ!!!

いきなりの発砲。砲身から白い煙が上がる。空砲ですか………確かに朝に弱い麻子さん相手なら効きそうですけど……

「なんだ!?!」

「どうしたの!?!」

と、近所の人たちが騒ぎ始めた。まあ流石に近所迷惑ですよな。

みほ「すみません!空砲です!」

と、キューポラからみほが顔を出して近所の人にそう言う。すると私達の後ろから

麻子「やれやれ……千歳さんに起こされた挙句、ラッパに空砲……これは起きざるを得ないな」

千歳「おはようございます、麻子さん」

麻子「おはよう……」

と、目をこすりながら眠そうに言う。

みほ「冷泉さん。おはようございます。」

優花里・華「おはようございます!!」「」

みほたちは麻子さんに気付き挨拶する。そして麻子さんは着替えをもつてパジャマのままⅣ号に乗る。

「あ、おはよう千歳ちゃん。千歳ちゃんも一緒に乗っていく?」

みほがそう言うが私は首を振って

千歳 「心配ありません。こういう時のために内海さんたちを呼んでありますから」

みほ 「え？」

みほが首をかしげると。IV号の後ろからT-44-100がやってくる。そして操縦席の入り口から内海さんが顔をのぞかせる

内海 「おはよう千歳。待ったかい？」

千歳 「おはようございます内海さん。大丈夫です。時間通りですよ」

内海 「それは良かった。あ、おはようみほ」

みほ 「おはようございます、内海さん」

と、みほと内海さんは互いに挨拶をし私はT-44-100によじ登り、操縦席にいる内海さんに

千歳「さて……それでは内海さん。お願いします」

内海「任せてよ」

内海さんにそう頼むと俺は砲塔内に入り、IV号を先頭に試合会場へと向かうのであった。

「なになに?」

「どうしたの?」

朝から戦車の騒音で近所の人たちは顔を出す

みほ「す、すみません」

と、みほが謝ると花の水やりをしていたのかおばあさんが二両の戦車を見ると

「あら〜4号久しぶりに動いているの見たわね〜。それに新しい戦車まで。気合い入っているわね〜」

と、感心したような何か懐かしそうな声でそう言い、

「うわあ〜戦車だ〜」

「戦車道復活させたの本当だったのね〜」

と小さな子供と母親がそう言い隣では

「試合か、頑張れよ〜！」

と、応援してくれた

みほ「はい。ありがとうございます！頑張ります！」

と、みほが元気よく返事をする。一方車内では

優花里「歯みがいてください」

華「顔も洗ってくださいね」

沙織「終わったら制服着替えて。あ、朝ご飯あるからね。おにぎり作つといたから」

と、IV号の中では冷泉が着替えをしたり、おにぎりを食べたりして、みほがその様子を見て微笑む。一方こちらの中では

優音「Z z z ……」

彩月「優音……よく寝てるね。内海……」

内海「うん、寝てるね」

彩月「この振動の中、良く寝てられるね」

千歳「それが優音ですよ、彩月さん」

そう。優音は今は機銃席で帽子（艦これの響がかぶってる帽子）を深くかぶり寝ていた。

内海「千歳から受け取った時には既に寝そうだったしね……」

彩月「どうする？起こす？」

千歳「いいえ。今はそつとしておいて下さい。優音は途中で起こされると不機嫌になりますから。港に着いたら起こしてあげて下さい」

彩月「あ、はい。」

そんな話をしながら、私達の戦車は進む。そして、しばらくして港に着いた。そして対戦相手の聖グロリアーナも到着した。聖グロの学園艦を見たとき、自分たちの学園艦より二倍近く大きいことに沙織さんたちが驚いたのは言うまでもありませんでした。